

城戸武男作品集

目次

自序

作品譜

- 覺王山日暹寺鐘樓競技設計入選圖案 (昭和二年)
- 病院草案
- 田中善助氏別邸 (昭和三年)
- 伊藤次郎左衛門氏別邸廣間草案
- 八重垣町仲店
- 大阪毎日新聞健康住宅競技設計入選圖案 (昭和四年)
- 愛知醫科大學行幸紀念館
- 名古屋市廳舍試案
- 百貨店試案 (昭和五年)
- 八重垣劇場
- 大禮紀念京都美術館試案
- 伊藤萬藏氏別邸
- 名古屋株式取引所事務館 (昭和六年)
- 外科田中病院
- 名古屋織物卸賣同業組合事務所
- 俱樂部計劃案
- 三重縣上野小學校御眞影奉安庫
- 小美術館試案
- 柴山乙彦氏
- 小松屋商店 (昭和七年)
- 神戸取引所計劃案
- 伊東信一氏別邸

ホテル計画案

神野金之助氏別邸客間

田邊耳鼻科醫院

(昭和八年)

扇屋商店

海ヲ望ム小住宅競技設計入選圖案

福壽生命保險株式會社

文

其後に來るもの

自序

学校を出て十五年、竹中工務店に店主の恩寵を身に集めて過した私は、たゞ竹中を通してのみ社會を眺め、社會に觸れ、社會に動きつゝ今日に到つたのであつた。言はゞ竹中といふ角度を透してのみ社會を識り得たのであつて他を識らない。先に店主より退店の許しを得、今主家の業務中の一部分である建築の設計のみの職業を以て新に社會へ動いて行くにも、やはり主家の店風は守りたい。

私の建築に掌わつた初めの七年間は、神戸一名古屋一大阪一名古屋一神戸一名古屋と新に起される建築物を追ひ求めて建築の實地を學びつゝ轉々と歩いた時代であり、昭和二年に名古屋支店設計部に足を止めた。

大正、昭和にまたがる五年間は、恩師鈴木禎次先生の直接指導薫陶を受けた。先生の美を求むの熱情と、營む建築への熱愛は建築技術の外に私の建築への思索と愛情を深刻なものとなした。これが後の七年間の私の制作の強い源泉であつた様に思ふ。

この支店設計部主任としての七ケ年は多方面から知遇と鞭撻を受けた時代であり建築のあらゆる種類につき研究の資料を與へられ、又所謂「名古屋」の持つ「さび」に觸れ、古典への愛着から民族的反省に及び、建築思想への一つの途を凝視

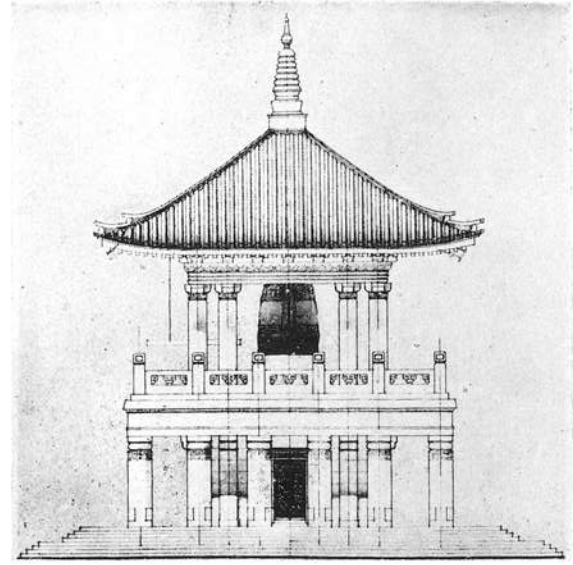
する現在の私が導かれたのである。時代の變化を以てしても、物質的影響を以てしても變らない本質的なものが人間性の中にあるとすれば、それは吾々が持つ祖先への愛着であり、吾々に呼び起す民族意識である。

凡そ建築は自然の結構を征服せんとする人智の進歩の跡であるが、建物自身の機能的方面、經濟的方面、建築主の趣味嗜好等種々の強い力を受けつゝ作者の技術によつて營まれるものであつて、その作者の個性、傾向の表面に強く表現せられる場合と弱い場合とがある。各人の趣味傾向もそれは一つの過程であり、一つの段階であつて、次第に深まり又變つて行くものであらう。そしてその作は常に不完全であるが、然し作者の思索と熱愛とは常にその作にも勝り、容れられてもよからう。

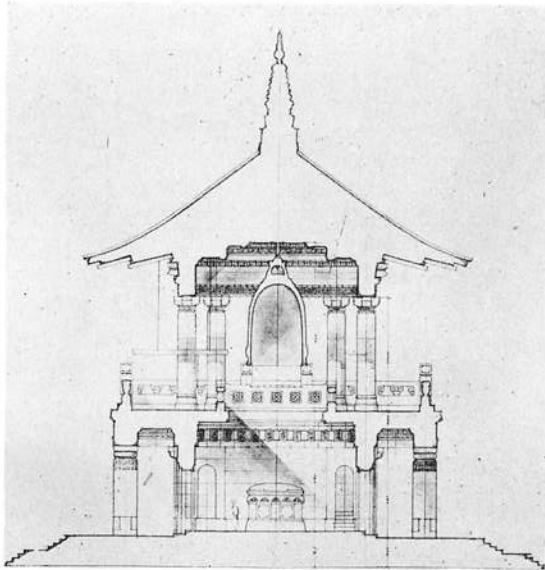
この貧しき作品集は竹中に在つた終りの七年間公務又は餘暇にものした私の恥しき制作の落葉であり大体に年代を追つて並べた。私に働きかけた影響、私の動きつゝ來つた跡を物語るものとして、諸賢の高覽を得ば幸である。

昭和九年四月一日

作 品 譜

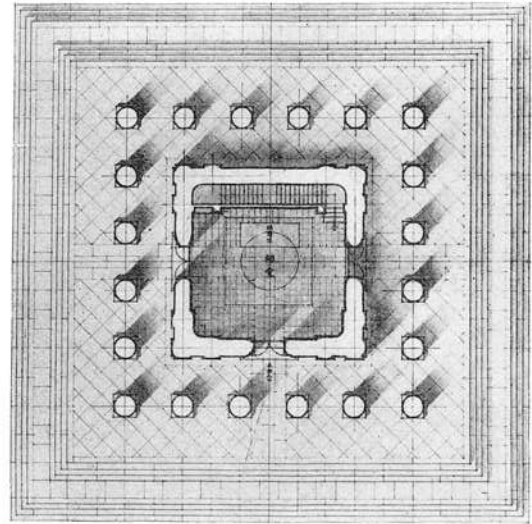


正面圖



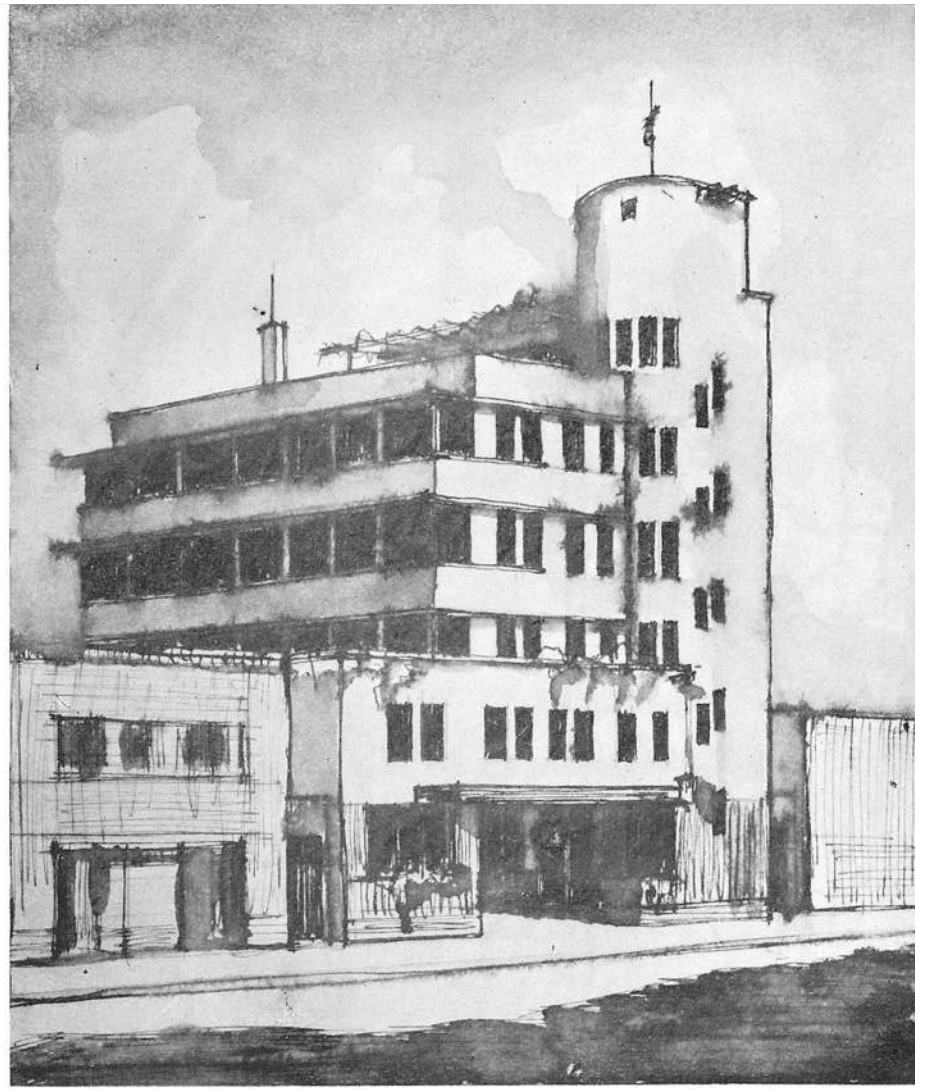
斷面圖

平面圖



覺王山日暹寺鐘樓競技設計入選圖案

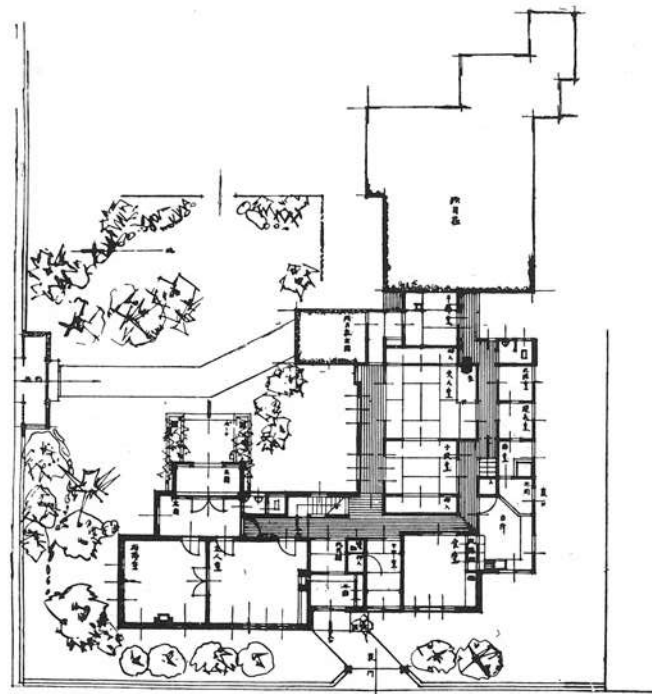
一等入賞



病院草案

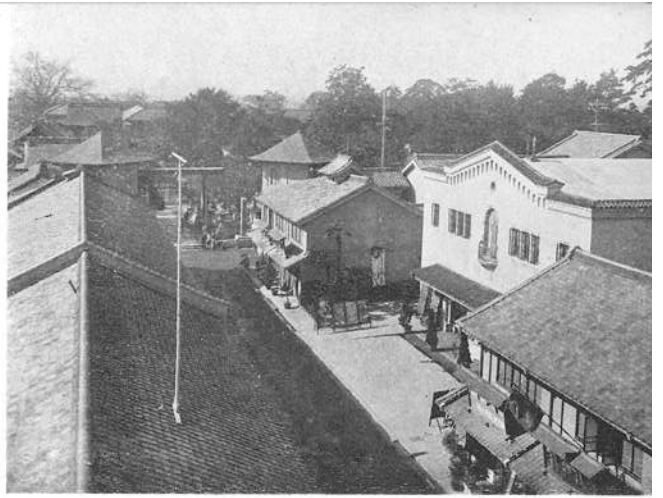


外 觀

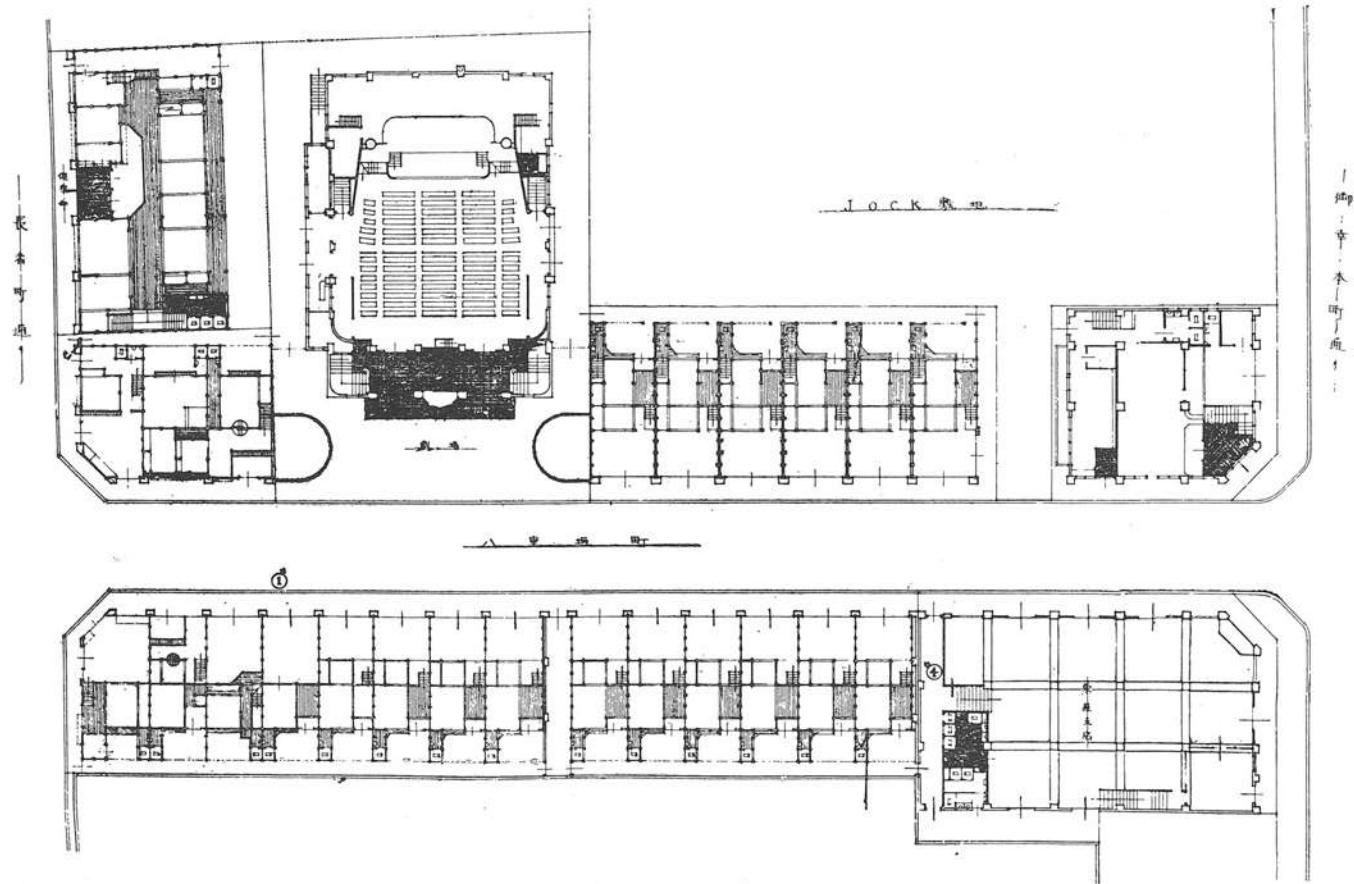


平 面 圖

田中善助氏別邸



全 景



平 面 圖

八重垣町仲店

竹中工務店設計部



八重垣町通



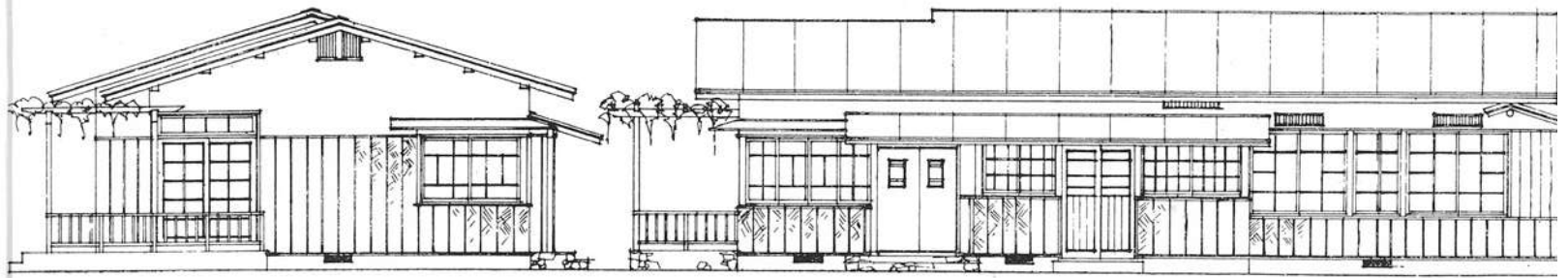
長者町通



長者町通

八重垣町仲店

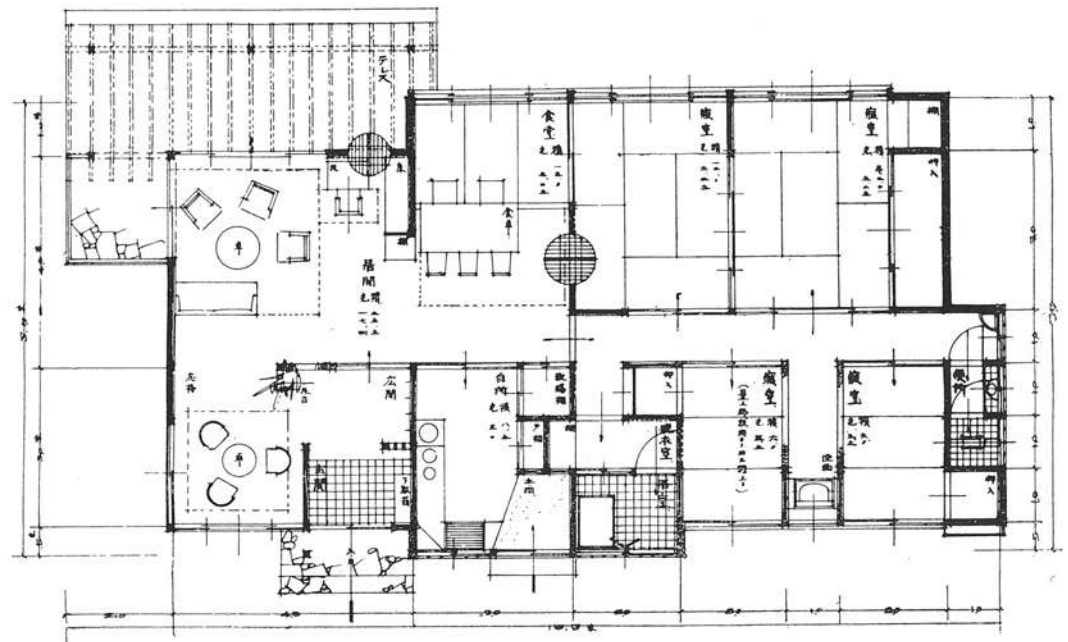
竹中工務店設計部



東側正面圖

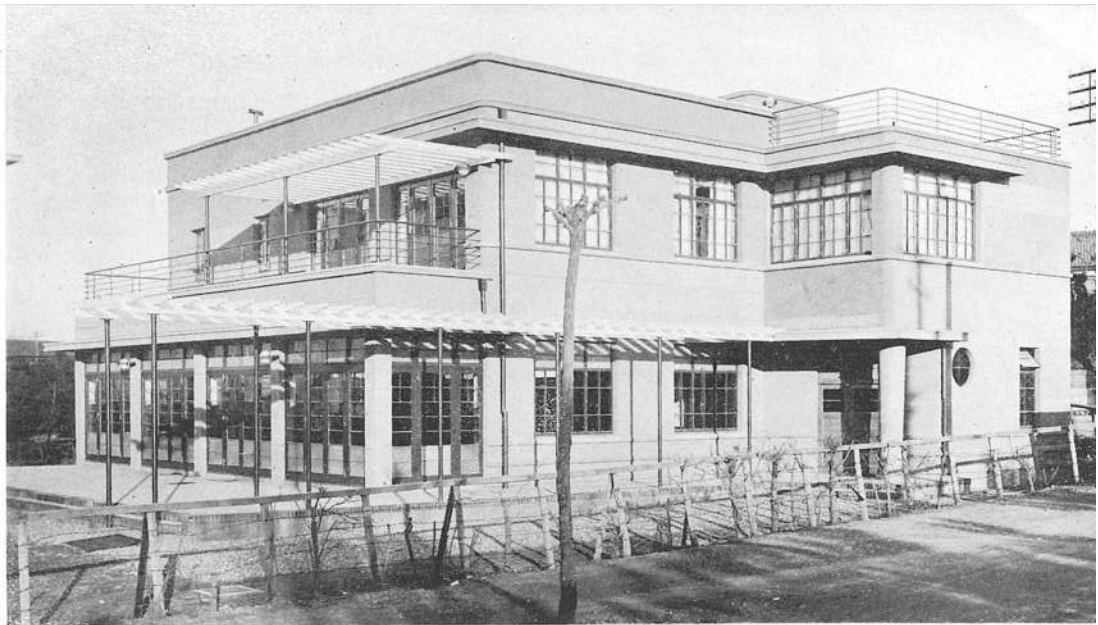
北側正面圖

平面圖



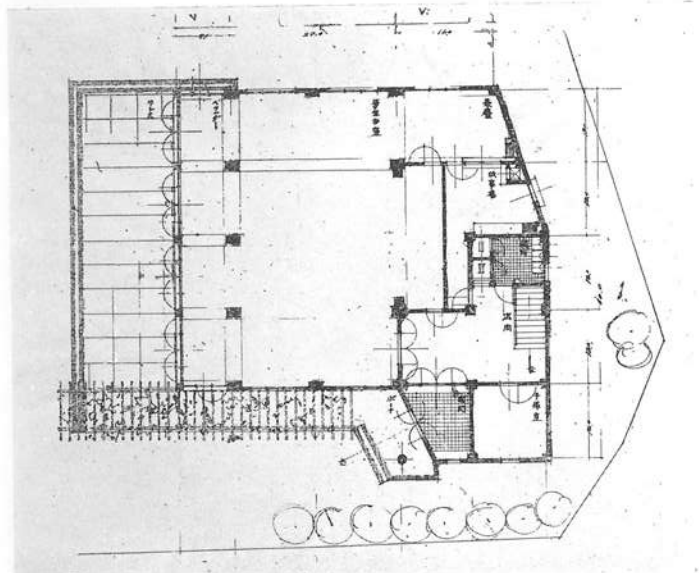
大阪毎日新聞健康住宅競技設計入選圖案

二等入賞



外觀

平面圖

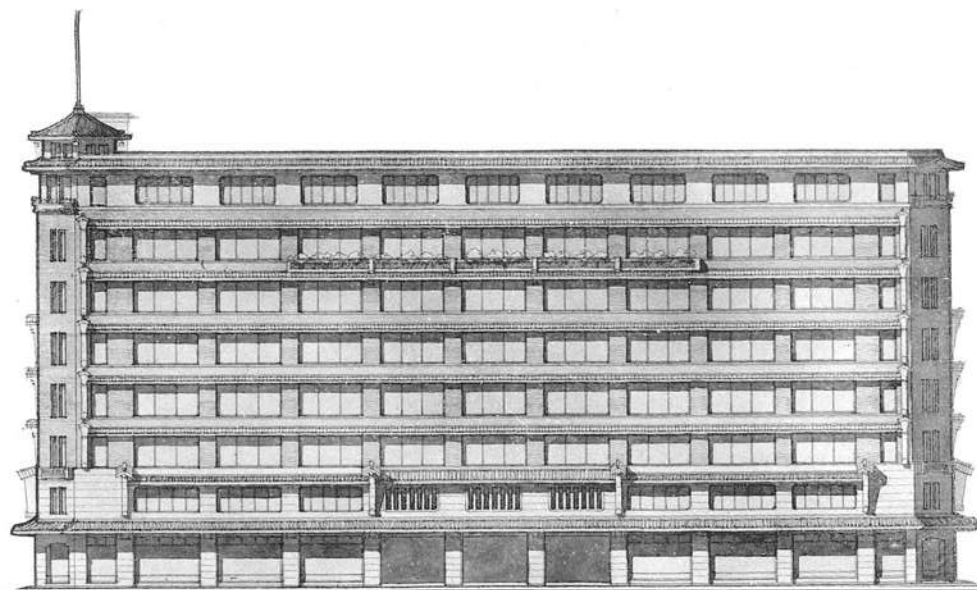


俱樂部室





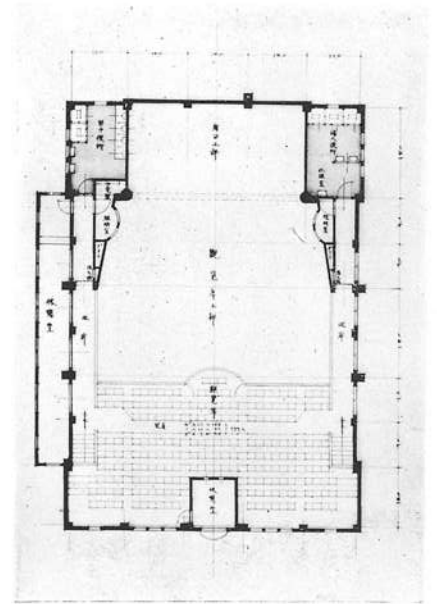
名古屋市廳舎試案



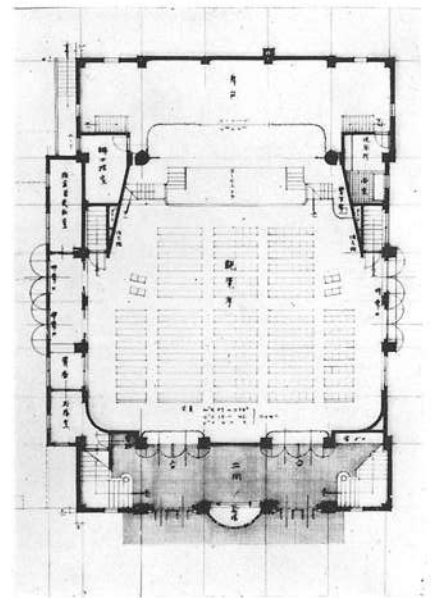
百貨店試案



外 觀



階上平面圖



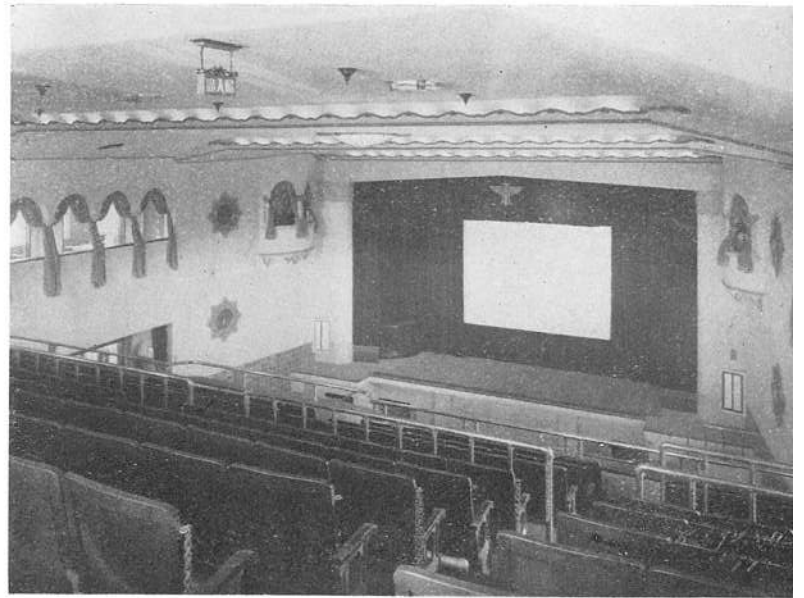
階下平面圖

八 重 垣 劇 場 竹 中 工 務 店 設 計 部



廣 間

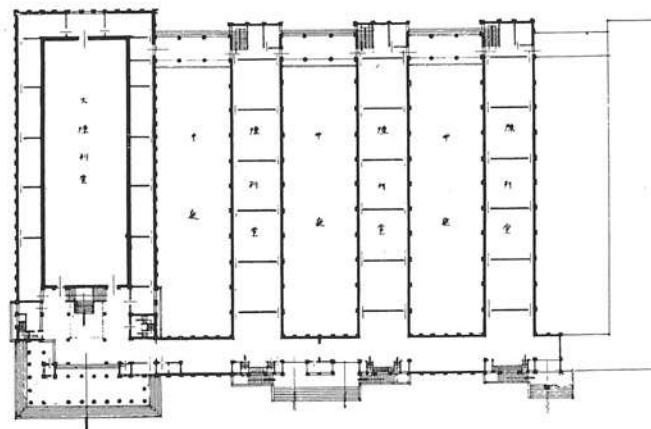
觀 覽 席



八 重 垣 劇 場 竹 中 工 務 店 設 計 部

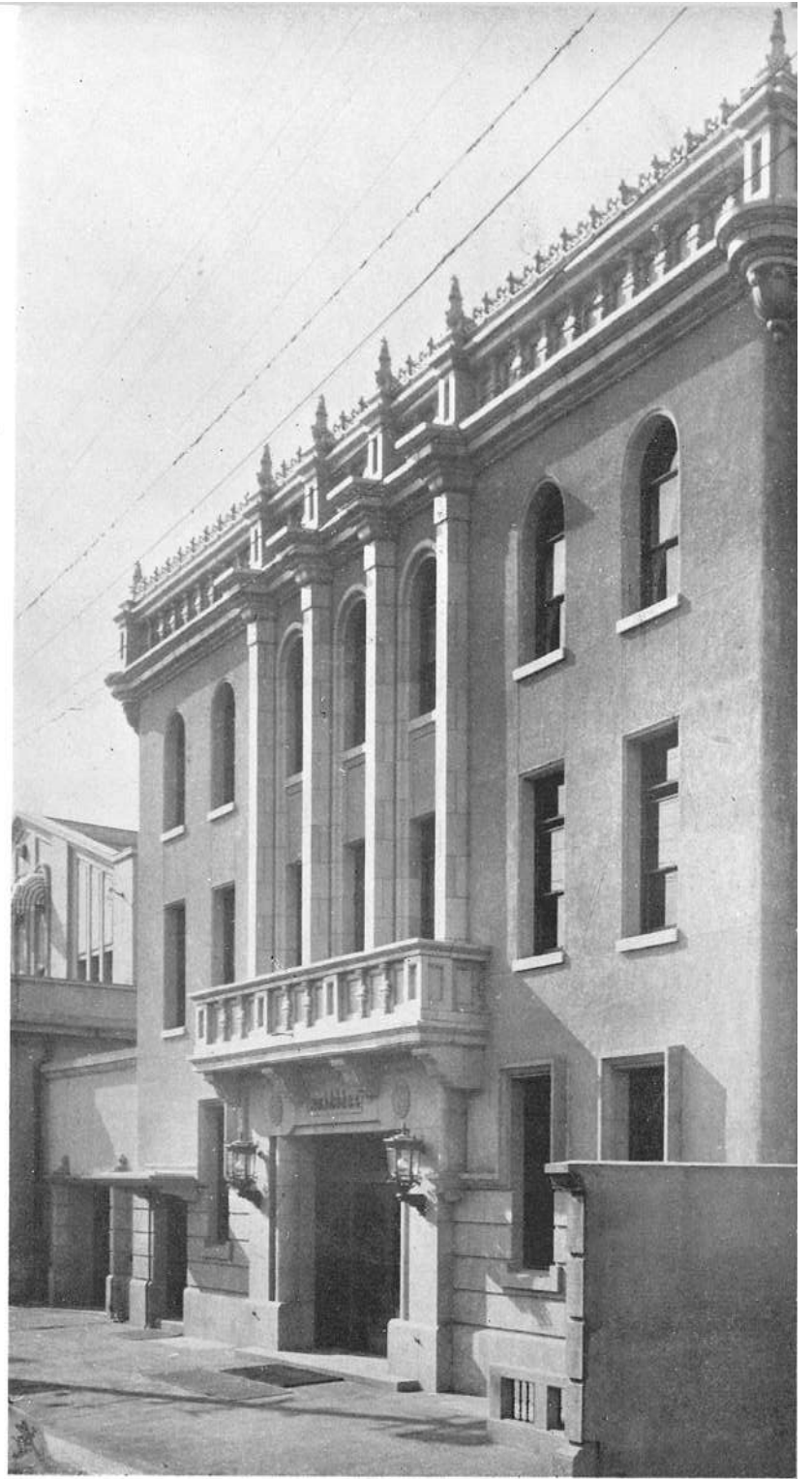


透視圖



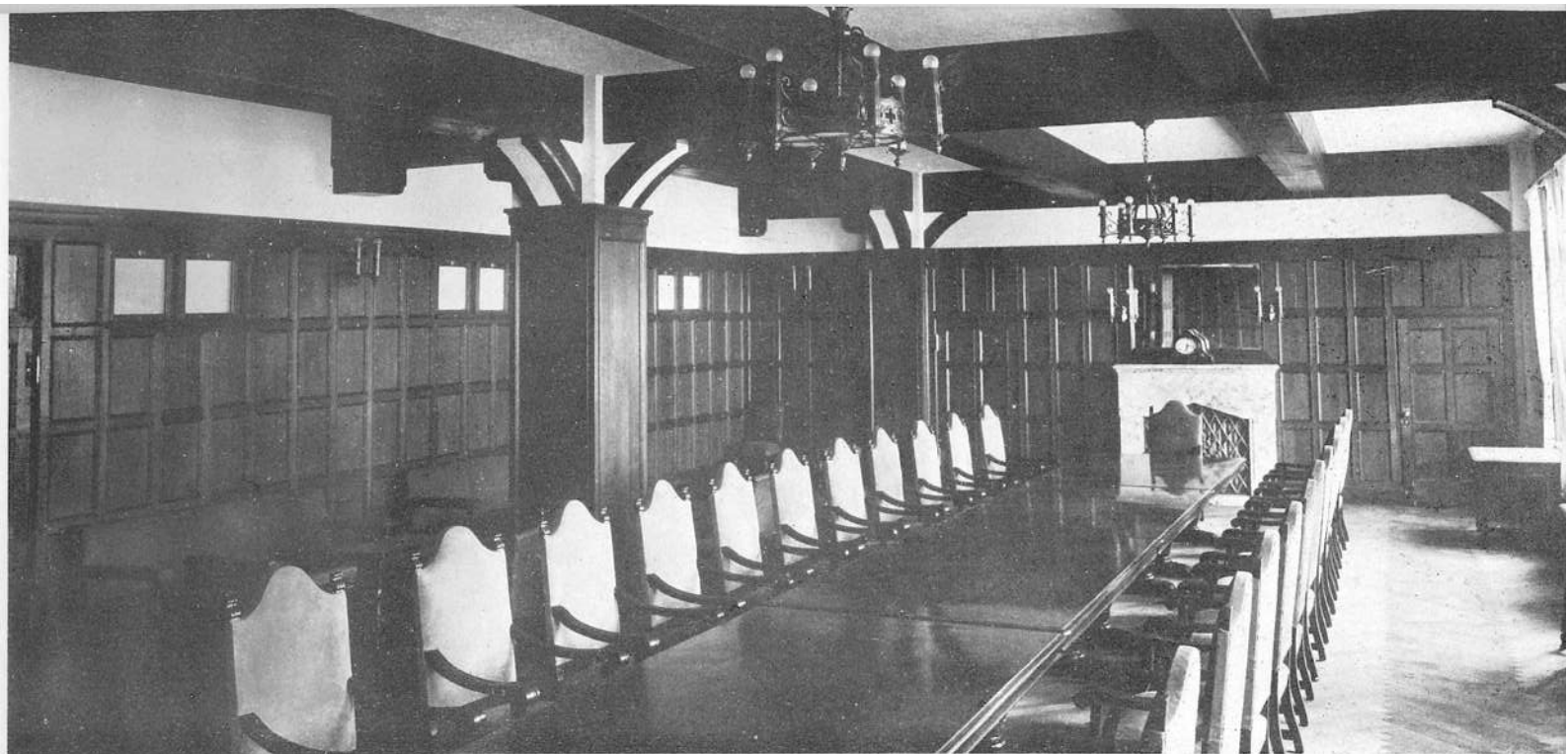
平面圖

大禮紀念京都美術館試案



外 觀

名古屋株式取引所事務館



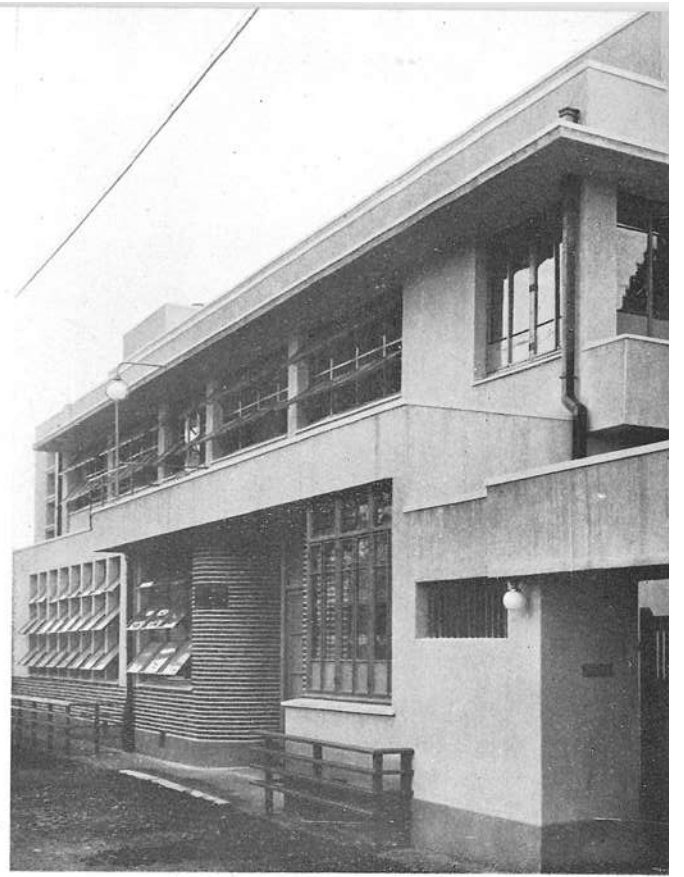
會議室



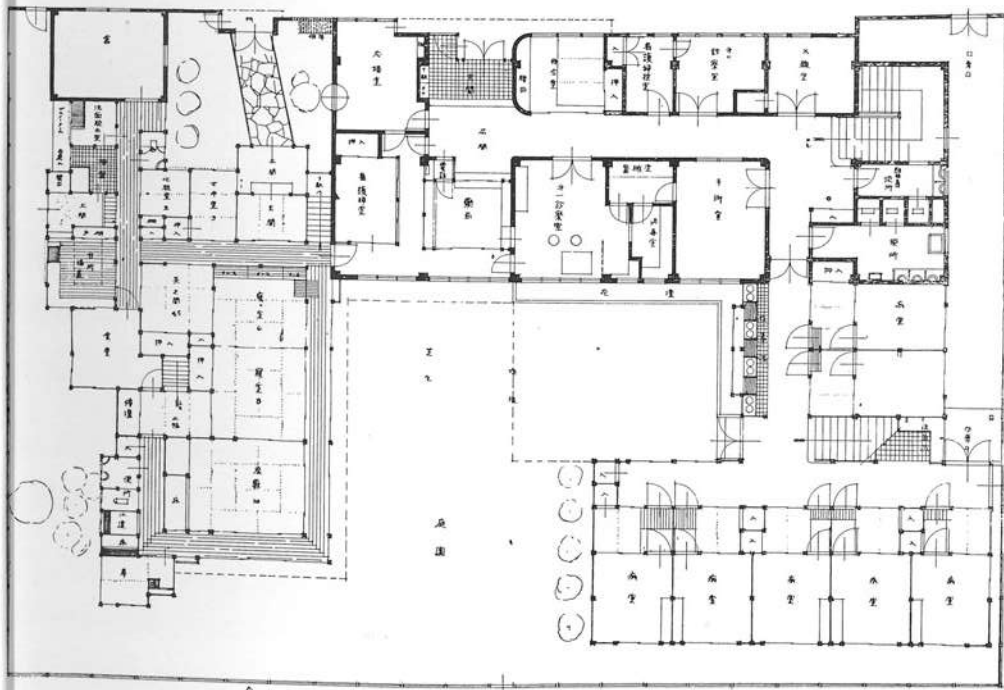
屋上一部

屋 上



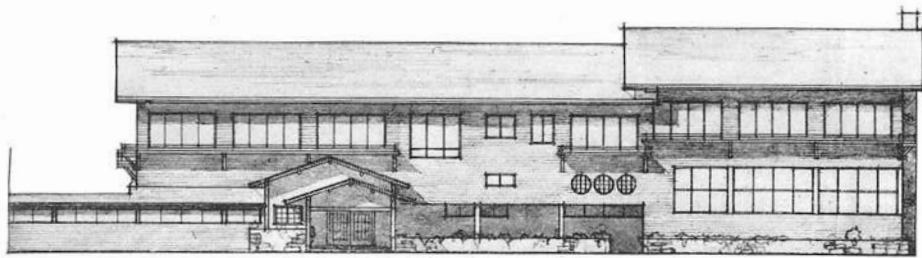


外觀



平面圖

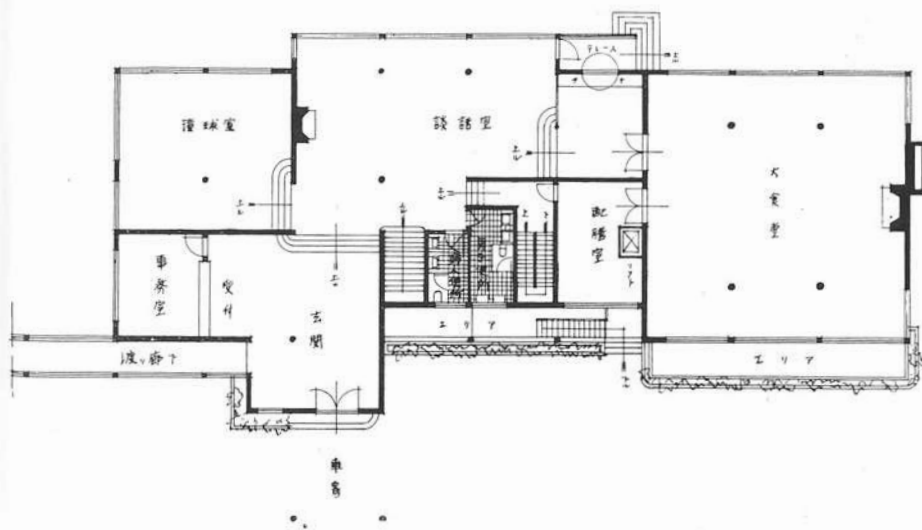
外科田中病院



正面圖



側面圖

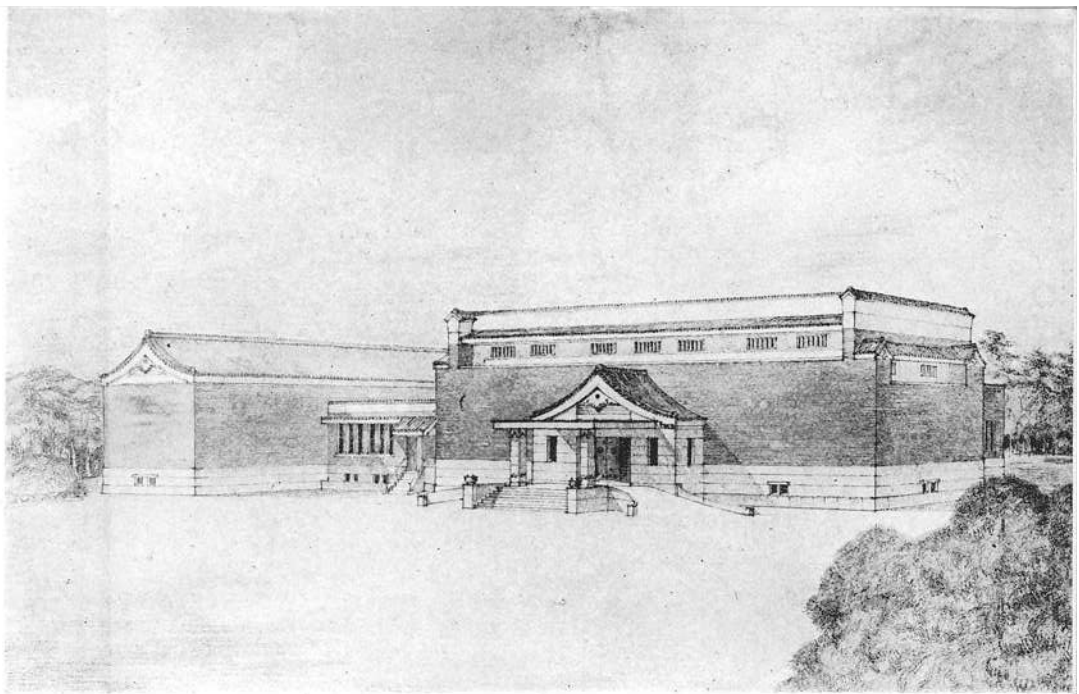


平面圖

俱樂部計劃案

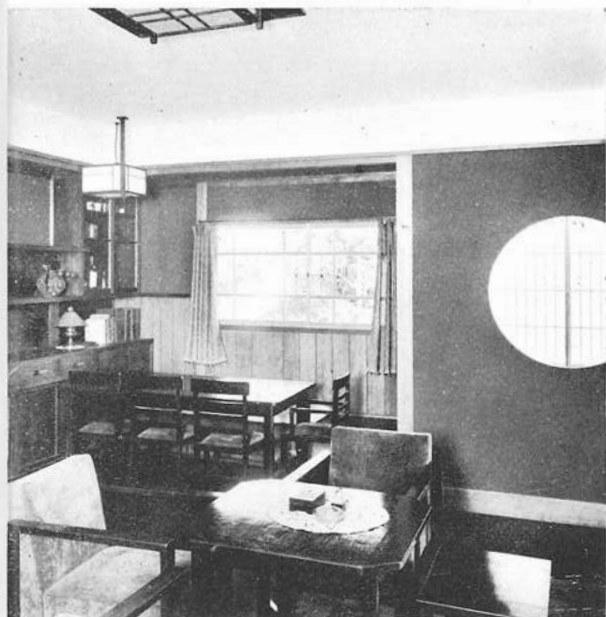


外 觀

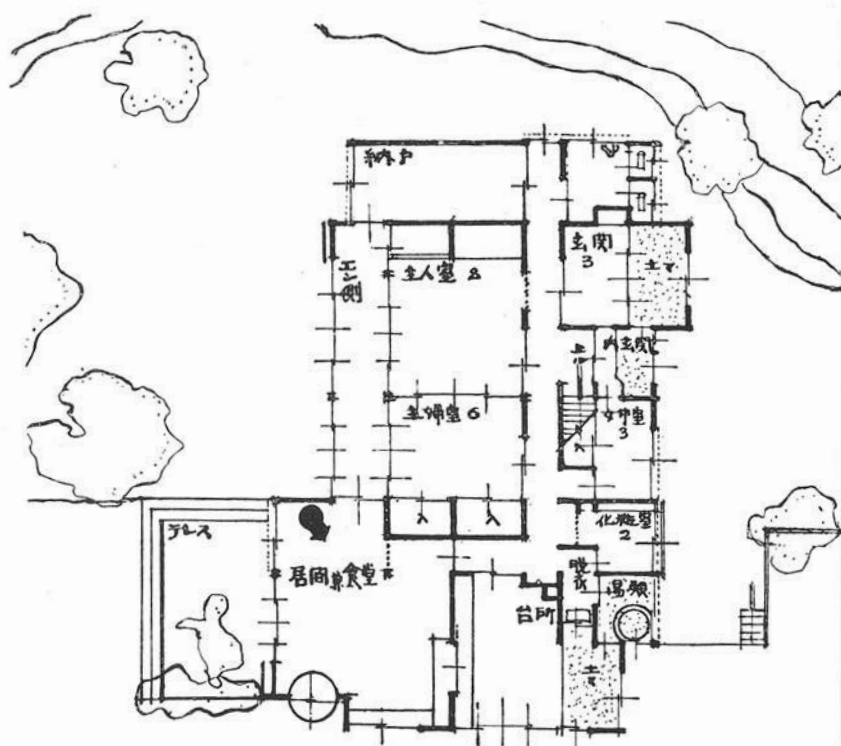




外 觀

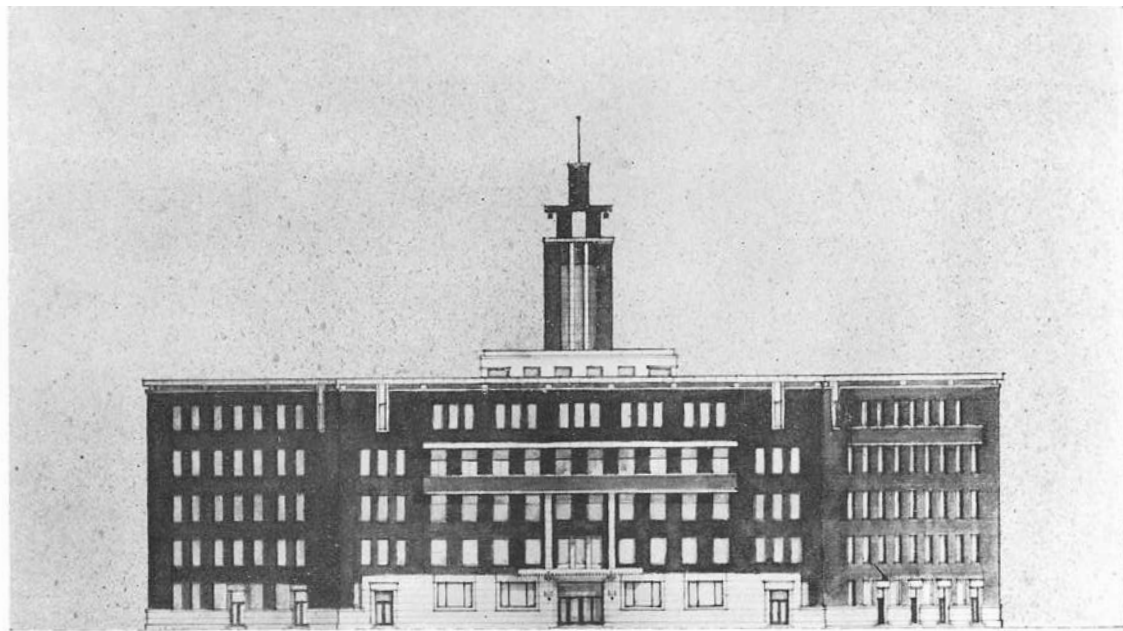


居間兼食堂

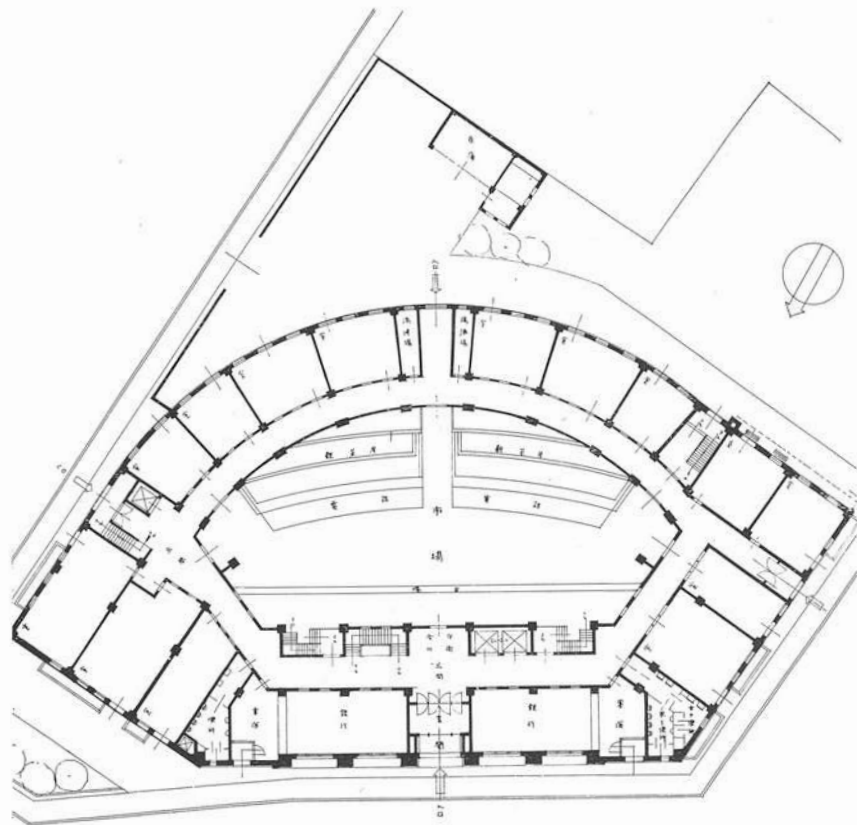


平 面 圖

柴 山 乙 彦 氏 邸



正面圖



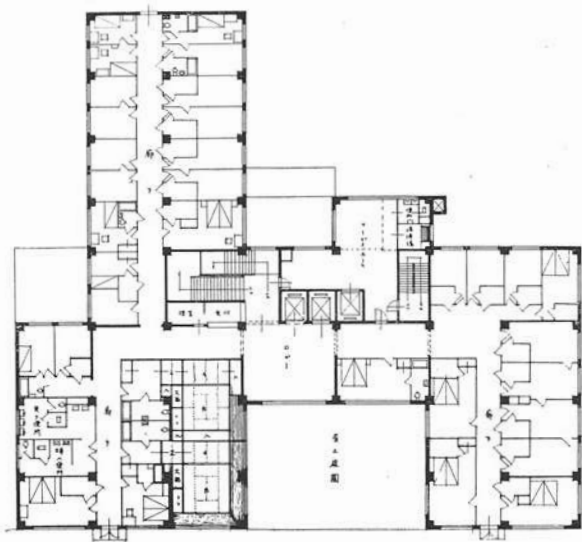
平面圖

神戸取引所計劃案

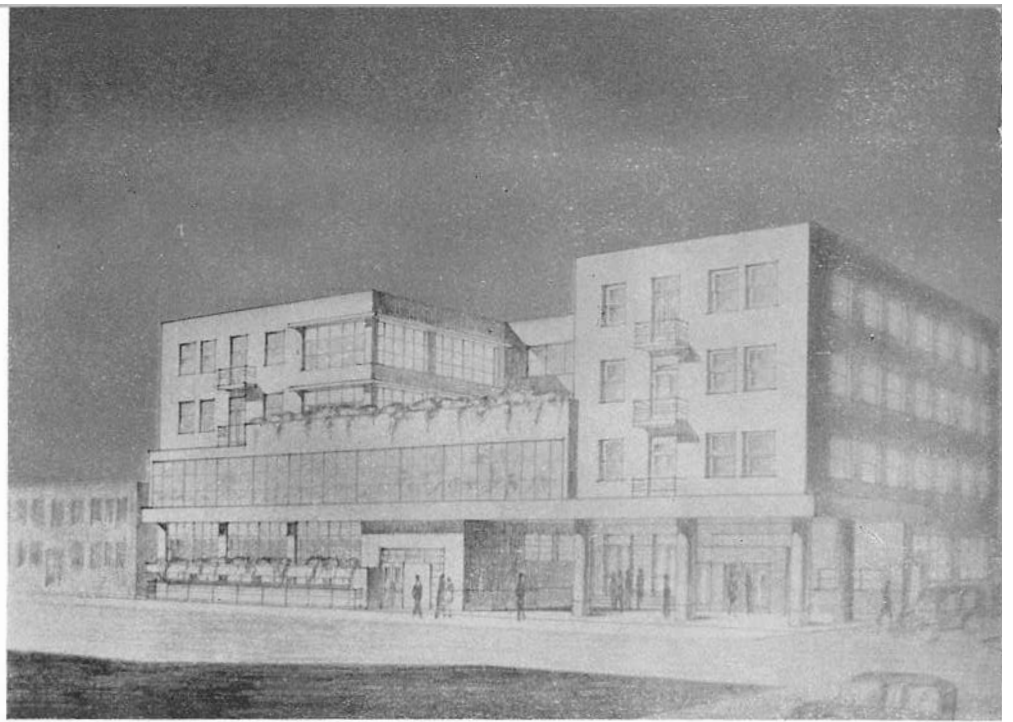


外 觀

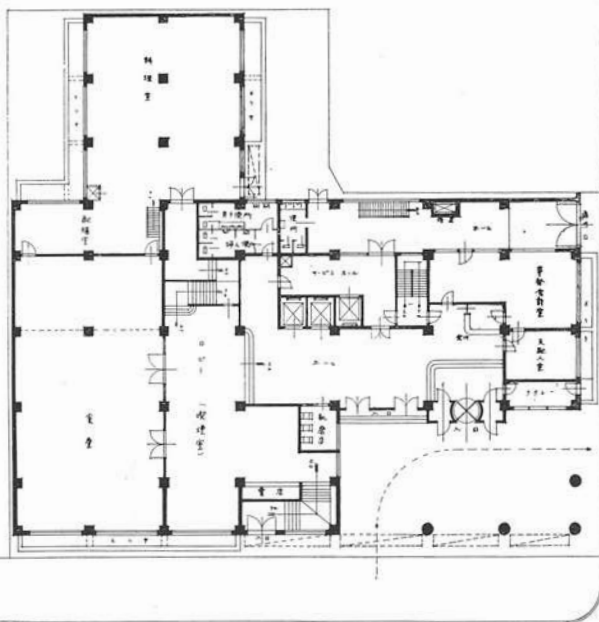
伊東信一氏別邸



三階平面圖

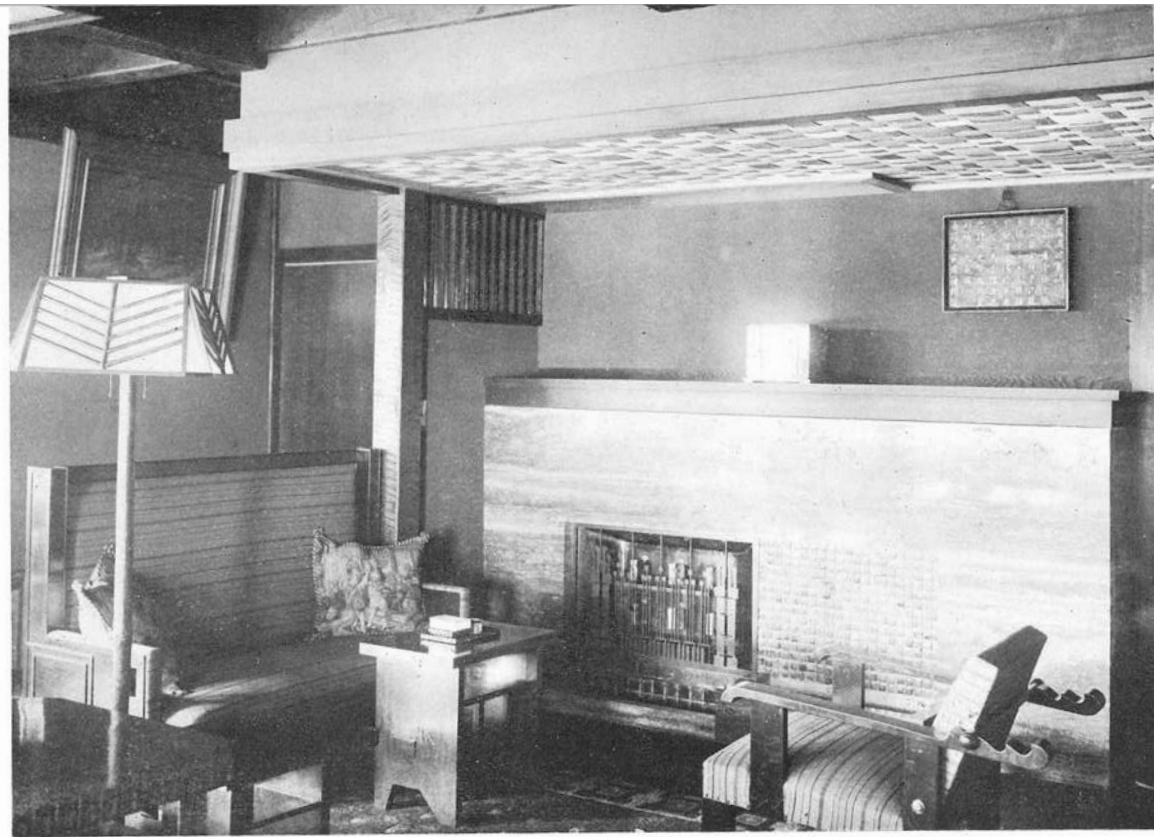


透視圖



一階平面圖

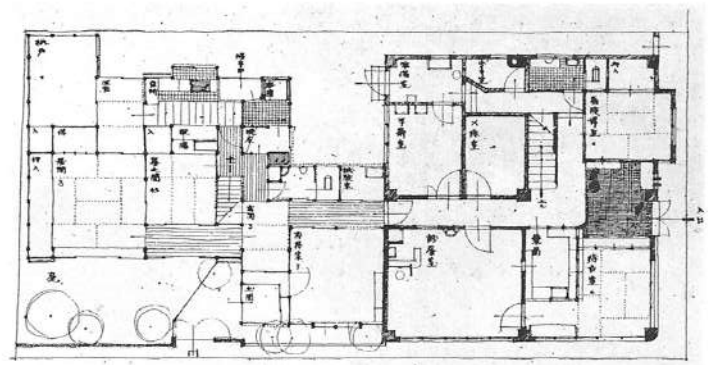
ホテル計劃案



神野金之助氏別邸客間



外 觀



平 面 圖

田 邊 耳 鼻 科 醫 院

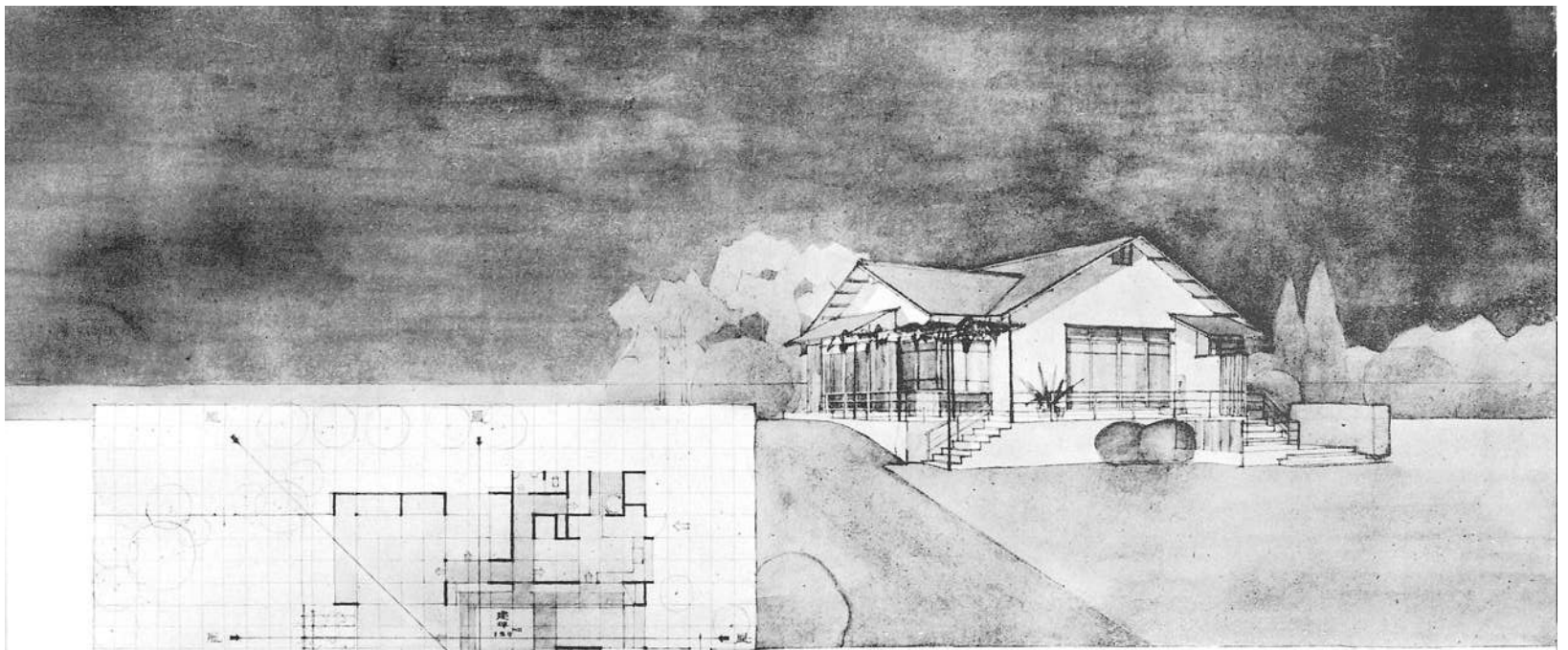


休憩室

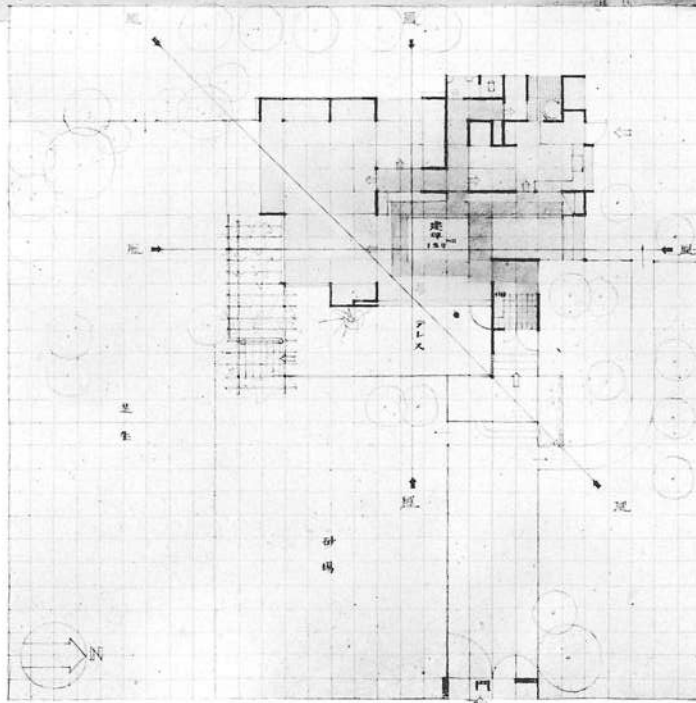
扇屋商店



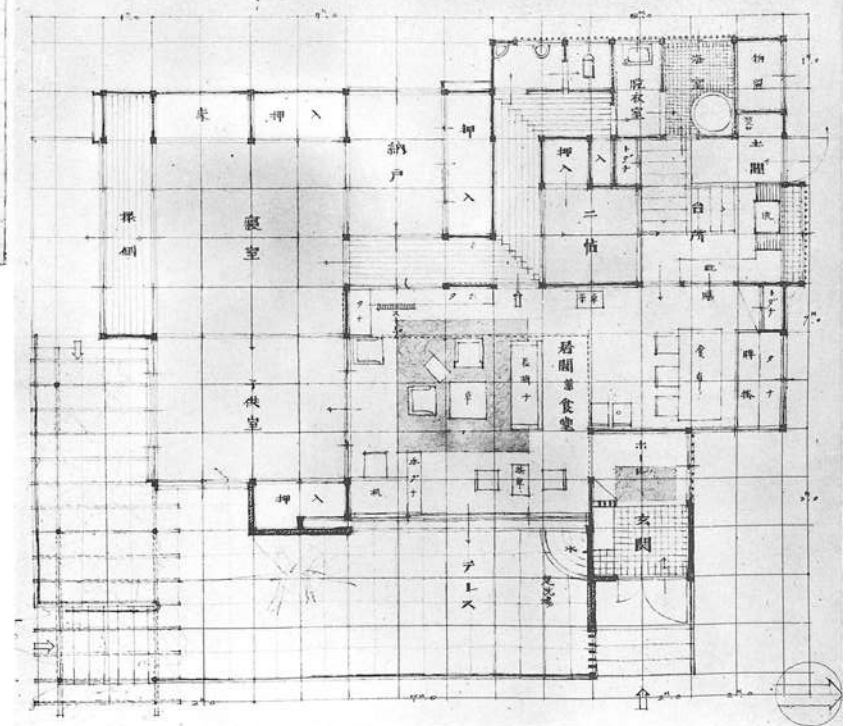
外觀



透視圖

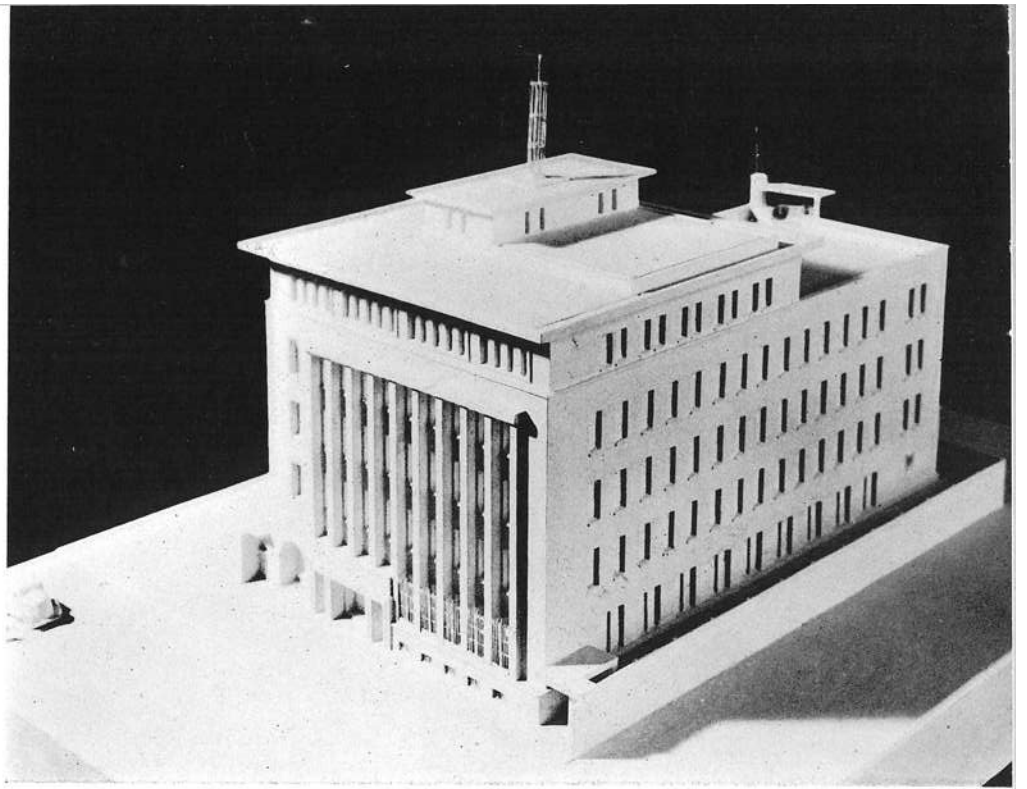


平面圖



海ヲ望ム小住宅競技設計入選圖案

一等建築學會東海支部賞



模 型



透視圖

其の後に來るもの

現代建築に表はれたる四つの傾向に就いて

緒 言

現代建築の歴史

現代建築の四大潮流

建築の本質と美

西洋建築様式主義

國粹建築主義

國際建築主義

民族建築主義

結 語

緒 言

發展の過程をたどりつゝある現代建築を一個の靜止の狀態として其處に何等かの特質を探し出さうとすることは、あたかも過去の建築を單に一個の存在として價値づけやうとすると同様に避けがたい矛盾を含まざるを得ない。

我々が過去の建築を考察研究するのは或る時代の建築が他の時代の建築に比し優れるか劣れるか、又或る時代の一個の建築が美か醜かを知る爲ではなく、それ等の建築が各時代にあつて矛盾が多かつたか少なかつたかの問題にある。従つて現代建築も歴史的過程の視野から見るとき其處に表はれた諸種の形相について、我々は今その美醜の問題を茲に決しやうとするのではなく、如何なる意識の下に如何なる社會關係に依つて生じたかの内的關係を考察究明しやうとすることにある。

それがやがて現代建築の持つ歴史的役割についてその發展の正しい方向を我々に教へるものでなければならぬ。現代といふ動きつゝある狀態の下に現代建築を考察して見ることも許さるべく又必要であらう。

現代築建の歴史

人類はその發生の當初よりその集團生活の必要に應じて幾多の建設物を構築して來た。先史以前の人類に對しては我々は考古學の分野に此れを譲るとしても、世紀前に既にナイル河岸エヂプトの文化は輝かしき建設的遺物をなほ今日に傳へて居る。西洋建築史の一頁は實に此處に初まつた。フレツチャーなる一建築史家は此の輝かしきエヂプトの建築を以つて建築發展考察の一對照とし、その要因を自然的條件（地勢、地質、氣候）と人爲的條件（宗教、社會狀態）に期し、彼の

西洋建築史の大系を確立し今日迄この變移説は相當に重視せられて來た。然し更に一步進んで考察すれば建築は材料其他自然的條件に依り制約せられることはあり得るも、人類の發生の當初より一定の位置に於ける地理的、氣候的條件は今日に到るまでほとんど一定と見做されても良い。然るに建築の様式は幾多の變遷を來してゐる。従つて建築の變遷を來したその主要因は實に人爲的な條件に依ると言はねばならない。

日本建築の變遷を説く日本建築史の大系が確立されてから僅かに數十年に過ぎず何れもフレッチャー氏の二大要因に基づいたもので、大古より工匠間に傳へられる天地根元の宮造なるものを日本建築の起原となし、それより伊勢神宮の建築に到る古代日本の建築變遷を、木造といふ地理的氣候に依る材料的な制限、宗教及社會制度の影響を以つて、過去日本の建築特質たる木造楯式建築の變遷を説明したものである。然しながら法隆寺に依つて代表せられる飛鳥時代の現出は日本建築の恐異的な一大變遷であつて、この大變移は單に地理的氣候的條件をその主要因とすることは出來ない。欽明天皇の十三年佛教傳來に依る我國の社會状態の一大變革の結果である。自來一千有餘年この佛教傳來に依る輸入建築を骨子とし我國建築が發展の過程をたどつて來た。然るに明治維新に依る封建制度の破壊と産業資本主義の勃發は西洋建築様式の輸入となり、過去日本建築の木造といふ材料的制約を遙かに突破して、新築建材料の使用に伴に現代日本の建築を形成するに到つた。これは佛教建築の輸入よりもはるかに大なる我國建築の變遷であり、茲では地理的氣候的條件より一層その要因を社會制度の變革に求めねばならない斯くの如く、建築は過去より現在に到るまで社會制度の變革に従ひ、社會的要求に依り、それが地理的氣候的條件の適合性の範圍内に於て發展の過程をたどりつつあるものである。

茲に現代日本建築の根幹をなす、西洋建築の我國に於ける發展過程を見るに、それは輸入せられてから僅かに六十餘年に過ぎないが、その間に於て、たへず歐

米の模倣は繰返へされ、新材料並に新構造法の發明と社會の進展に伴つて、此の短期間に於ても我々はこれを四つの時期に分ち得る變遷過程を持つて居る。

第一期は明治30年頃までを一區劃とし、外人技師が諸官衙その他の建築にたづさはり民間に於ては舊三井組や第一國立銀行の如く我國工匠が傳來の建築法に依り外人技師の手になれる洋風建築の細部をとり入れた折衷建築を作り、この時代の後期には外人技師に學んだ新しい建築家が西洋建築を直寫した時代である。第二期は明治末期まで、この期に初めて鐵骨構造が輸入せられ、35年竣工の三井銀行赤坂離宮等はこの期の建築である。第三期は大正時代にして更に鐵筋混凝土構造法の輸入があり、それが産業の勃興に伴ふ我國經濟界の發展に順應し所謂高層建築の出現を見た。第四期は昭和時代にして、前期の繼續としてなほ將來への發展を約束されては居るが、構造は前期の終りにおこれる大正大震火災以來異狀なる進歩をなし、更に諸種の化學工業の發達に従ひ新材料の出現となり、其處に幾多の傾向を發見することが出来るのである。

建築の形式に就て言へば、西洋建築輸入當時の彼地に於ける建築は所謂復興式の時代であつたから、我國西洋建築も従つて此を直寫し、第三期の時代に到るまでこの生命を保ちつゝ生長して來た。然し歐州に於ける産業の發展は機械文明の發達と共に新構造法及び新材料を供給し、これが新建築形式の出現を助長し、交通の發達と共に直ちに我國に反映し、現代に及んで居る。然して我國は世界大戰後産業方面に於て又文化方面に於て異狀な進歩をなし、明治大正期に於ける西洋の追従を必要と感じなくなるに及び建築に於ても新形式の輸入に刺戟せられ、更に過去日本建築への再検討から新に日本独自の建築様式への獨立を企圖するものも生じるに至つた。かくて我々は現代日本に建築せられつゝあるあらゆる建築の方向を知ることが出来る。只此處に寺院若しくは神社其他特に明治維新以來ほとんど何等の變遷をも認め得ない傳統的な日本住宅の如きはしばらく外に置き、産業の効與に伴ひ必然的に要求されつゝある産業建築—銀行、事務所、停車場—社會

組織の複雑化によつて要求されつゝある市民的社會建築—公共建築、劇場、博物館—其他都市の成長と共に新生面に以つて建築されつゝある洋式住宅に於て何れもが如何なる人爲的條件に依り如何なる形式を以つて如何に現代に出現しつゝあるかを見ること出来る。

現代建築の四大潮流

先づ第一にあげねばならぬのは過去西洋建築様式變遷の過程をなほ忠實に現代建築に折衷しつゝある「西洋建築様式主義」である。

第二は我國に於ける經濟的獨立の大國民的襟度が、徒らな西洋建築様式の模倣を現代建築に實行しつゝある西洋建築様式主義の反省となり、その反動として我國木造建築の傳統その物の尊重から、これを新産業建築社會的建築に形態のみを再現しようとする「國粹建築主義」である。

第三は大正末期歐州に於て過去の建築様式の踏襲が科學文明の發展に従ひ生じた幾多の矛盾を解消する爲に出現した建築思潮、即ち今日の文明は一國若しくは一民族のものでなく、國際的である如く、建築の形式に於ても亦國際的なければならぬといふ「國際建築主義」である。

一見我々が現代に立つて諸種の建築を観るときその何れもがこの三つの中に包含されてしまふ如く思はれるかも知れない。然し實際はもう一つの場合があり得ることに注意せねばならない。それは我國の文化の發展が一個の自主的立場に既にあり得るといふ民族的自覺を以つてそれに科學を基礎とした合理主義の立場にあつて建築の形式化を試みやうとするものである。即ち我國の木造建築の再現を企圖する國粹建築主義、或は建築形式の國際化を唱へる國際建築主義でもない。

我々はこれを「民族建築主義」と名付ける。

建築の本質と美

我々が茲で現代日本建築を四つの潮流に分つことを得た。今それ等の總ての潮流の何れがはたして現代日本文化の發現であるかを分析検討する前に我々の言ふ「建築とは何ぞや」の本質を究明してかゝらねばならない。「建築とは人類が地上に建設した構造物である」と言ひ「裝飾された建設物」であると言ふ。然しそれ等は單に一面のみを考察した一つの概念に過ぎず、その本質を究明して居るとは言ひ得ない。

建築の歴史初まつて以來、あらゆる建築物は漠然と地上に存在したものはあり得ない。エヂプトのピラミッドも中世の寺院も亦現代の建築もそれが墳墓として宗教の殿堂として又産業建築として各その時代の社會的要求があつて初めて何等かの形式のもそに出現したのである。従つて建築はこの目的を離れては考へ得られない。即ち茲で建築の本質はその内容にあり「建築とは社會的要求に依る目的を美的に具象化した建設物」と言ひ得る。社會的要求を具象化したものは單に建築ばかりでなく、人類社會を構成するあらゆる建設物機械や諸種の土木工事等皆そうである。然し建築はその具象化の過程に於て他と異なる特殊的方法即ち人間の感情に美をうつたへ得る手段の完了が伴はなければならない。茲の特殊な方法の存在に依つて建築は又藝術としても成立し得るのである。先に佛蘭西に於ける近代建築家コルビジエが「住宅は住むべき機械である」と絶叫し、それから全世界建築界の一つの流行語を形成したかの感があつた。然しコルビジエの意圖は單なる警句に過ぎなく、建築の全面をこの一言で表はしたものではない。建築は

機械では絶対にあり得ないのは、この特殊的な方法、即ち建築の内容（社会的要求）を具象化した美的な形式が問題となるからである。そして過去の及び現代のあらゆる建築技術はこの内容を形式化する素材並びに手段として諸種な構造法と諸種の建築材料とを與へて居る。従つて建築を形成する構造法や建築材料は發明や發見に依つて生成せられるものであつても、建築は常に藝術として成立し得るのである。だが茲で重要なことは建築はこの特殊的な方法即ち形式があつて藝術となり得、又この特殊的な方法自体が建築となり得るのではなく、總ての建築の本質はその内容にあり、内容があつてそこに形式化の過程に於ける特殊な方法が要求せられ、そこから藝術としての建築が形成せられるのである。従つて建築の内容と形式は二元的に全然別個の相反した二つの分子として夫等の合成や或ひは單に機械的な結合であつてはならない。この二つは一つの統一した型の中に於て互に關聯した合成の状態に於て鑄出されるとき初めて藝術としての建築が完成せられるのである。従つて藝術としての建築を論議するとき當然忘れられない美の問題もこの統一した型の中に於て初めてその根源を知ることが出来る。

茲で建築の形式に表はれねばならぬ美の問題を分析して見る必要が生ずる。我々が諸種の事物を觀て美を感じ或ひは快感を感じる場合があるが、それが何であるかを究明することは甚だ容易な問題ではなく、哲學や美學の範圍にゆづるとして茲では建築に於て我々が受ける美感には如何なる種類があるかを考へて見よう。例して見れば我々は近代の鐵骨橋梁や軍艦等を見るときその形態に美を感じるがあり得やう。これと同様建築に於ても冷房、暖房、換氣等の複雑なる配管の多數を建物の功利的な要求に従つて只配管した場合や、或ひは大講堂や工場の如く建築に於て大なる張間を必要とするために鐵骨又は鐵筋混凝土で工學に依つてのみある形の梁の斷面を決定した場合等に其れが何等意識的に美を求めやうとした試みでないにもかゝらず、その形に美を感じる場合があり得る。これは軍艦や橋梁と同じく只使用目的を極度に満足せしむる爲技術や工學の利用に依つて必

然的に生じたものに過ぎないのであるが、このやうに功利的な目的を完全に遂行した場合自然にそれが我々の感情に美をうつたへる場合があり得よう。これを先づ「**功利的結果から自然に生じた美**」と言はう。

或る場合には此等技術と工學に依つて解決された術の大きさや、諸種の設備の配管が我々の感情にうつたへて美と感ぜない場合もあり得る。かゝるとき我々はこれを他の方法に依つてそれを美と感ぜる形なり、方法に意識的に變更することがある。これは總ての技術や工學に於て、只一つの解法しかないと言ふことはなく、與へられた目的に對する無数の構造的な可能性が存在して居るからである。故にこれを「**功利的局限の中で意識して求めた美**」と言ふことが出来る。

又或る場合には一つの建築の窓の形とか配列とか壁体の色彩とかが我々に美を感ぜしめる場合がある。これは建築に限らず總ての藝術について最も積極的に働く美であり、「**表現の美**」と名付くべきものである。然しこの表現の美の中に於ても、それが全く前の二つと絶縁して居るものではなく、相互に相關聯した分子を包含して居るものもある。然し建築に關する限りに於て單に技術や工學のみに於ては解決され得ない部分が多數存在して居る故、従つてこの處に生じた美はこれは前二者と別個の美と取扱ふことが出来る。

我々はかく建築に表はれた美を「**功利的に自然に生じた美**」と「**功利的局限の中で意識した美**」と更に「**表現の美**」の三つに分類することを得たが、この分類方法は敢て我々の創説ではなく、現代建築家の既に説く處である。建築は機械であり得ないのも又、建築が藝術として初めて價值あり得るのも、この後の二つ、「**功利的に意識された美**」と「**表現の美**」の内に存在し建築の設計に於て重大な役割をはたすべき性質のものである。茲で我々は再び建築とは「**社會的要求に依る目的を美的に具象化した建築物**」と言ひ建築の本質として内容と形式に於ける美の問題に就て、茲に一定の意識を持つことを得た。かくして現代日本建築の四大潮流と稱するものゝ分析検討が初めて可能となり得る。

西洋建築様式主義

西洋建築様式主義は現代日本に於てその數第一位にありと言ひ得る。ギリシヤ式柱頭を持つた花崗石の柱型で構成された銀行、歐州中世寺院風の煉瓦構成を持つた商店、我々は目近に數多く發見するのである。此等の折衷の對照となつたギリシヤの神殿、中世のキリスト教寺院、或は近く亞米利加の高層建築、それ自体は各の社會的目的とその必然的な形式を以つて各その時代に出現したのであり、決して偶然の形式ではない。ギリシヤ國民の宗教的信念がその土地に豊富に埋藏された大理石を以て、更に強烈な太陽の直射を受ける土地に於て、あの纖細なアカンサス葉の大理石柱型を創造し、そこに宗教的信念を發揮した。又中世に於けるキリスト教徒の敬虔なる信仰はかの天への尖塔を創造し歐州中部の陰鬱、鈍重な氣候に依り、一個一個の煉瓦となつて表現せられたのであつて、社會的要求に依り、神殿として、禮拜堂として使用目的を満足し、又石造として或ひは煉瓦造としその独自の構造に依る必然的な形態と、各時代精神に依つて表現された美を持つて出現したものであり、其處に建築の本質たる形式と内容に於て、合理的に合成された形態と認めることが出来る。

而して、此等の過去西洋建築様式を模倣した現代建築に於ては、冷房、暖房、換氣等あらゆる設備は完成せられ、銀行として又商店として、その社會的要求である使用目的——即ち現代日本の社會形態である産業資本主義の要求するあらゆる功利的目的——には何等の矛盾を來しては居ない。又此等建築の表現美に於ても建築家の努力に依り相當の効果を上げて居るかも知れない。然し建築の本質としてのその内容と形式に於て多くの矛盾が認められる。

現代産業資本主義は常に幾多の生産部門を各獨立獨個にその資本集中化し、生産に従事しやうとする傾向を示めし、その結果は一個の生産部門に於てトラストカルテルの組織を形成し、この集中資本は又地理的に生産區域に依つて集中せられんとする傾向である。従つて現代社會の建築に要求するものはこの資本の集中區域（大都市）に於て、それ等の集中資本の要求するあらゆる條件で、その最大要求は生産の利益獲得の最も容易な可能性であり、最も單純な生産の方法に依る最も増大な生産を得ることであり、これを満足する爲には地域の經濟的利用と合理的平面計畫と經濟的構造法と建築材料の撰擇の可否と建築工程の速力増進方法の如何であり、この結果は建築技術の機械化と合理化と規格化となる。現代科學文明の發達は既に太陽光線の位置的分析を解決して居り、構造は鐵骨、鐵筋、混凝土構造となり、建築材料の大工業化せる大量製産に依る鋼鐵製窓枠、プレート硝子、合金屬、絶緣材料の撰擇建築施工機械の利用を與へて居る。

従つて現代建築は此等の素材を以つて、如何に建築の内容を形式化するかにある。過去西洋建築様式の現代目的建築への折衷はその社會狀勢の相異建築材料の相異により、如何に合理的折衷化に成功するもなほ矛盾の狀態になければならぬ。西洋建築様式の折衷は單にその様式の跡襲であり、形式化の過程に於ける美の表現に際しては、花崗石の柱型、手摺にしては餘りに高い石造勾欄又徒らに高い天井が必要となる。それ等の建築が事實使用目的に何等の缺陷なく、又美的に成功して居るとしても、それは我々が言ふ三つの美「功利的結果から自然に生じたもの」「意識的に求めたもの」「表現の美」の中只最後の一部分の範圍内にあつて、其處には無駄な勞力と消費の存在する限り、現代社會の要求する經濟主義に依る合理主義と明に相反する。

過去西洋建築様式の現代建築への折衷は單に建築家の認識不足に依る形式化の結果であつて、それは建築は原則的に異つた二つの原理——藝術としての建築と技術としての建築——が建築を形成すると誤り考へることに因る。建築の本質

はその内容の美的形式化であつて工學的構造技術は形式化の素材並びに手段である。

我々は内容と形式の統一されたる關聯の下に初めて藝術としての建築をとりあげんとするもので、西洋建築様式主義には満足し得ないであらう。

國粹建築主義

斯く西洋建築様式主義は現代日本建築の多數を占むるものであるが、この勢力の一つの反動として所謂國粹建築主義を生ずるに到つた。これの企圖するところは西洋建築様式主義が過去西洋建築の様式を現代建築に折衷形式化しやうとするに同じく、過去日本建築様式を現代建築に折衷形式化せんとするもので、東京驛歌舞伎座、震災記念堂、其他最近の各地美術館に見る如く何れも最近の鐵骨混凝土構造法と、最近の建築材料を以つてあたかも西洋建築様式主義が此等を以てギリシヤ建築の柱形を形成した如く、日本寺院建築の細部を取り入れて形成して居る。

我々が現代にあつて、日本の過去の建築を見るとき、法隆寺の堂塔に或ひ名古屋城に建築藝術として多くの價値を發見することが出来る。然し、それは皆飛鳥時代或ひは桃山時代といふ各時代即ち歴史的過程に於ける一定の時に於て、日本といふ國即ち地理的に一定な位置に於て、各の時代精神と氣候地質に依る材料と構造法に依つて各の社會的使用目的を満足せしむる爲に必然的に形成して來た形式なのである。建築材料は濕潤にして氣候温和な「豊葦原瑞穂國」は所謂山紫水明の地となつて、無盡藏と稱せらる木材であり、従つて構造は柱と梁の結合よりなる架構式構造法となり、雨量の多い氣候がその勾配屋根となつて今日の日本建築の特長を形成した。従つて今現代の新構造法と新材料とを以つて過去の形

の再現を計ることは、西洋建築様式主義と同じく矛盾を繰り返へさざるを得ない。只茲に問題とすべきは我々は少くとも過去の日本から何等かの遺産を譲り受けて居り、従つて建築に於ても祖先の遺作に多くの美を発見することが出来るといふことである。

何れの時代に於てもその藝術は何等かの点に於てその時代以後に、かなりの普遍性を持ち、又それ以前の社會的特質を持つ藝術がふたゝび歓迎されるといふことは歴史的にあり得ることである。それだからと云つて無條件に現代建築が過去日本建築様式の再現として是認されて好いか。何故なら各時代はそれより先行した各の時代より諸材料、諸事情を譲渡されそれを全く變革したものであり、先の時代は次の時代に對してはその生活諸條件を指定し、それに一定の發展一つの特殊性を與へて居るが、其處には社會機構に従つてそれが傳承し發展し、又變化し消滅する多くの要素が複雑に存在して、その舊來の諸事情は全く變化された形になつて居ることを歴史は教へて居る。又、我々が日本の古典に西洋のそれより多くの美を感じるといふことに依つて過去日本建築様式を現代建築に踏襲しなければならぬならば、我々は同じく服裝美に多くの藝術的構成を見る過去日本の服裝を踏襲してかゝるべきでなければならぬ。然るに現代にあつて王朝時代や徳川時代の服裝を再現しやうとする人は誰れも居ない。我々は自働車に乗り、電車に乗り、洋服を來て活動しても少しもそれに對して疑問を持つては居ない。只建築に於てのみ過去の日本建築に單に美を感じるからと云つて、無條件に現代建築に再現を試みる必要はない。若しもその試みが功利的美的に成功して居るとしても、それは單に「表現の美」に關する範圍内であつて現代の社會的諸條件とは合致しないものである。

最近の懸賞募集の條件として、過去日本建築様式を現代建築に再現することの理由として「日本趣味」又「東洋趣味」の字句があるが、建築は社會的な要求に依る使用目的があつて生れて來たもので、決して遊戯的な玩具でなく、決して趣

味のみではない。又その意味を字句通りに解釋するとしても「オモムキ」や「アデハヒ」は我々が形式の下から受ける個人的感性であつて、建築の形式が決定せられる根本ではなく「表現の美」の完成された結果の一部を形成するものに過ぎない。所謂「日本趣味」は過去の日本建築様式を折衷した現代建築の中から必ずしも受け得られるものでもなく、反つて此等と全然別個の意圖からの現代建築の中からより多く受け得られる場合がある。過去日本建築に表はれた「日本趣味」は過去日本建築の必然的に生じた格好や材料の構成や色彩に基づくものであつて、社會的要求に依る現代建築は如何程巧みに折衷化しても過去建築と全然同一でない限り、不自然な構成になる。現代國粹建築の表現美に日本的な味ひや趣きを求めることは木に依つて、魚を求むるに等しいものとなる。

更に又建築が此等の「日本趣味」とか「東洋趣味」であるための理由として「周圍の還境に調和する爲」と云ふことが最近の懸賞募集規程に擧げられて居る。想ふに周圍の還境の眞意はその建築が建築せられんとする歴史的過程の或る一定の時代に於ける社會狀勢であり、又或る一定の場所に於ける氣候、地勢的條件である。現代建築の調和せなければならぬ周圍の還境は現代日本——即ち資本主義的經濟組織に於ける社會的經濟的條件であり、又建築されんとする都市の氣候及び地勢（雨量、溫度、日照）等である。従つて過去日本建築を現代建築に折衷しても決して現代日本の還境とは調和しないであらう。然るに國粹建築主義が「周圍の還境に調和すべきこと」を最大の主因として居るのはその結果から見るに、還境なる眞意を解せず、單に狹量に「周圍の景觀」と解釋して居る。お城の近くの故を以てお城を表現し、お寺の近くなるを以てその五重塔を模倣するといふのが現代國粹建築の立場である。我々ははたして周圍の景觀に意識的に建築を調和させねばならぬか。古代より現代に到るまで日本の山水の持つ景觀には恐らく變化はあり得なかつたであらう。若しも過去の建築が意識的に周圍の景觀に調和すべく建築されたものとして解するならば、此等古代より現代に至る建築はほとんど

同一の形式であるべきである。然るに建築は事實寺院に於て、神社に於て、城廓に於て、また住宅にあつて、歴史的過程に順應して變化して來て居る。それは法隆寺の堂塔も名古屋城も寺院として、城廓として只各の社會狀勢の下に獨自に形式化された必然的な形式であるからではないか。従つて過去の建築は少しも意識的に周圍の景觀に調和するべく建築されたものではない。若し法隆寺の堂塔や名古屋城が周圍の景觀に調和されて居ると言ふのは、此等の各内容の合理的な形式化が必然的に周圍の景觀を形成した結果であり、建築が周圍の景觀を自ら決定するものである。我々は過去より現代に至るまで幾多の建築に於て、又現代に於ける使用目的に依る幾多の建築の種類に於て、その一つの場合に於て理解され、他の場合に於て理解されないと云ふ結論は成立しないと信ずる。故に國粹建築様式主義が所謂「周圍の還境に調和すべきこと」を單に周圍の景觀と理解して居ることの如何に誤りであることを我々は知り得るであらう。

國際建築主義

算定せられれ鐵筋混凝土の斷面は世界各國何れにても同一であり得る。即ち國際的である。かく現代世界各國の建築を形成せる構造法、建築材料、建築機械設備その他あらゆるものは益々國際的となりつゝある。従つて此等の國際性はやがて統一された國際建築の下に生れなければならない。「建築は常に國民的であり又常に個人的であるが、然し個人—民族—人類の三つの同心圓の中最後の最大の圓が他を包含するに到る。茲に國際建築の名が生れる」建築家グロピウス氏がかく絶叫して國際建築主義を提唱してから未だ何程にもならない。然し如何に多くの建築家が彼の提唱に熱狂したことだつたらうか。「建築は住むべき機械」を提

唱したユルビジェ氏は、ジュネーブの聯盟會館に於けると同じく極寒のモスコウの消費組合本部に於て、國際建築の名の下に、世界各國何れの場合、何れの土地にても建築は總て機械の利用に依つて氣候、風土に何等の係數をも持たしめないことを提案した。氏は一種の機械的な採暖法に依つて寒國に適せぬガラスの壁體(それは窓といふにはあまりに大きすぎる)を惜げもなく採用した。

かくの如く理論的國際建築はあらゆる問題の解決を現代科學に一任し、合理主義の旗の下に、國民一個人一人類の中の最後の究極に向つて國際的形式化の極度にまで發展し得る可能性の下に唱導せられたもので、其處では何等の國民的一個人的な分子の包含は許されない。その結果建築材料の使用の矛盾を解消し、現代産業資本主義の一特長たる大工業化せる多量製産の材料たる鐵とコンクリートとガラスにその合理的材料を求め、其處に何等かの表現の形式を求めやうとして居る。鐵と混凝土の合成に依る構造法は現代に於ては、一つの型板の中に柱と梁の架構を鑄出すことであり、過去の建築に於て建築材料として石材並に練瓦を使用した爲必然的に構造上の最要素となつた壁體を必要としない。従つてこの空間はガラスの壁を以つて被はれる必要がある。かくしてあらゆる國の建築はその地理的條件の如何に拘はらず、その社會的要求に對する合理的解決を與へることによつて同一であり得る。

然し建築の本質は決して材料と構造のみにあるのでなく、建築されんとする社會の何等かの經濟的條件に於て、その要求を満足することにある。我々がその現代社會機構を見ると、世界人類は總て同一の立場に存在して居るとは認め難い。現代文明國は産業資本主義經濟組織の下に統一されて居るとはいへ、各の歴史的過程に應じ、アメリカの資本主義と日本の資本主義とが全然同一であるとは言ひ得ない。そして又多くの未開土人國に見る支配的經濟組織の下にはるかに低位の發展段階にあるもの或ひは又ソビエトロシヤに於ける社會主義的經濟組織にあるもの等種々の社會機構の中に人類は全世界に生存しつつあることを見る。

従つてフランスに於ての社會機構からの國際建築は如何にその地理的條件（氣候の問題）を科學的に解決することを得ても、それはソビエトロシヤの建築とはなり得ない。ユルビジエーがモスコウ消費組合本部に提案したグラス建築はこの意味に於てそれは單なる試みに終つてしまふであらう。

又我々が現代機械文明發展の段階を、現代に關する限りに於て見るとき、それは尙も發展の過程をたどりつゝ、はたして理論的國際建築の實現を可能ならしむるに満足であるだらうか。建築機械設備に依る地理的條件の解決は可能であつても建築の本質たる機能——使用目的がはたして總て科學的に解決されて居ることは言得ない。我々の日常生活の定式なるものは科學的數理的に解決されるには未だ遠い未來を持つ。

理論的國際建築は單に一つの將來への提案として、その現實的な可能性を與へながらもなほ未解決のまま残された多くの分子を包含して居る。そしてそれは人類の永遠の理想と伴に必然的に遂行すべきものであつて、社會機構の變遷過程に従ひ、必然的に變遷して行かねばならぬものである。建築の獨り求むべきものでは絶体にあり得ない。

現代日本に於ても東京白木屋の如く、國際建築主義に依ると稱する多くの建築を發見することが出来る。然し夫等は決してグロビウスの提唱した如く、又ユルビジエーに依つて提案された如く、それが遠い未來への問題であるとしても、可能な限りに於て、理論的に地理的條件を解決した結果であるとは言ひ得ない。

日本に於ける太陽光線の直射に依る商品の汚損を機械的に、合理的に解決することなく、百貨店建築へのグラス建築の提案は只單に國際建築といふ一つの流行型を讚美した産物に過ぎない。龐大なグラスの平面はやがて赤や白のペンキで塗らねばならぬ破目に陥つて居る。即ちグラスのリアリズムの下に生れ出た國際建築が單にグラスのロマンチズムに終つて居るのが見られる。

かつて西洋建築様式或は日本建築様式に隨喜し此等を現代建築に折衷しやうと

した立場と其處に如何程の相違があらう。現代として我國の國際建築は又折衷主義の立場と同じく、其處に現代科學文明に起因する建築の合目的性と合理性に就て何等の解決をも與へて居ない。そして日本に於けるこの立場の建築はガラスのロマンシズムの下に一つの流行型を追つて居るに過ぎない。建築の本質はその社會的目的を完全に遂行し、一定の土地に於けるあらゆる問題をその形式化の過程に於て解決されねばならぬ以上、それは單なる様式主義に墮して失まはねばならないであらう。

人類の發展は絶えて靜止しない。我々が展望の方向に於て、理論的國際建築が現實化せられる可能性は認め得るとしても、それはやがて地球上のあらゆる人類の問題が解決されたとき初めて出現し得るのではないか。

民族建築主義

理論的國際建築が提唱せられて、それがガラスのロマンチシズムとなつて現實化せられつゝ現代日本建築の一流行型を作りつゝあるとき、我々は茲で一つの終極を求めねばならない。それは現代日本といふ歴史的發展段階の一過程に於てその社會機構と地理的氣候的條件を充分に満足せしめ、即ち建築の本質としての内容と形式の中に何等の矛盾の認め得ないものであらねばならない。

現代日本は度々繰返へすが如く、産業資本主義の下にその輝かしき發展をつけ、近代科學に於ける工業の機械化は生産の手段を改變し、能率を高め、必然的に生産品の定型化を誘致し、やがてそれは過去の家内小工業に比して能率的な大量生産をうながし、極度の經濟主義と自由主義を以つて特質づけられて居る。建築の技術に於ては材料の生産方法の進歩が材料の規格化、構造の單純化定型化施

工法の合理的組織化となり、之れが素材並びに手段となつて現代社會機構の要求を満たす建築の機能を何等かの形式の下に美的に形式せんとする處に現代日本建築の歴史的價値を認めねばならない。従つて我々が現代日本建築の四大潮流と稱するものにあつて、西洋建築様式主義や國粹建築が如何に功利的方面に於て、その經濟主義を満たして居るかの如くに見えても、それは決して現代建築技術の完全な把握の下に立つて居ない限り、そこに歴史的な價値は認めることは出来ない。

現代建築家の使命は合理主義の下に如何に使用目的を形式化するかにかゝつて居る。鐵筋混凝土構造の柱梁に依る架構法は壁体を必要としない開放性を帶び、建築材料の大量製産は材料の全面的な統一となり、使用目的に依る各細部の大きさは、合理的に單化せられ、特質的に形式化せられる。

茲て我々は國粹建築主義が單に過去日本の建築をその形式のみを懷古的に觀察するに反して、その社會的聯關性の下に内容と形式を回顧的に觀察する必要がある。過去日本の建築は木材を構造材とした架構式構造法で何等壁体を必要としない。西洋建築様式の壁体構造法に比し小なる柱を残すに過ぎない椽側は窓と言ふにはあまり大きく開放的であり、又西洋建築様式の不必要な室の大きさ、入口の高さに比し、疊一帖を單位として室の大きさを決定し、入口の高さは大室小室に拘はらず一定の寸法となり、規格化定型化を發見することが出来る。これは永い歴史の實驗室に於て日本の地勢的氣候的條件に於て作られた一つの型であり、理論的國際建築が經驗的に實現されて居る。我々はこの優れた遺産を今や完全に受け繼いで來たのである以上、理論的國際建築主義の方向に向つて、我々は如何にこの遺産を把握するかに問題が残されて居る。

現代日本の建築が開放的であつたのは單にそれが木造建築であつたからでなく現代家屋衛生學に順應して居るからであり、形式の單一型を生んだのは、單に日本人の趣味性からではなく、必然的に相應じた經濟主義の結果からであらう。國粹建築様式主義が日本建築の特長をその屋根に求め、それを現代建築に再現せんと

することは一つの錯覺に過ぎない。日本建築の屋根は雨量の多い日本の氣候を解決する爲に木造建築として必然的に生じた形式であり、一の特徴ではあるが、現代建築は新しい防水法を持ち、雨量の問題を解決して居り、鐵とコンクリートに依る構造法は傾斜屋根を必要としない。日本の開口に必要な庇は夏期に於ける強烈日照と雨量の二つの問題に期して居る。然し現代の建築技術は既に完備された鐵製窓枠を持つ限り、現代日本建築に於て、これをとりあげ得るのは只日照に關する一つの問題に歸して居るのである。

従つて我々は過去の遺産を検討するに際して、觀念論に依つてのみ終始してはならない。過去日本建築の特殊性を現代建築の立場から常に見出さねばならぬ。即ち遺産の批判的再検討の線に沿ふて、日本の現代の社會組織、建築技術と一致するものを有機的に我々のものとなすといふ方向に向つて進まねばならない。その結果我々は明に地理的一定の位置にある日本といふ國のローカリテイを科學的に把握することが出來、それが現代の建築技術と相まつて合理主義の下に社會的要求たる建築の本質を満足せしめたものとなる。更にそれ等の素材と手段に依つて、我々が形式化しやうとするその形式化の過程に於て、我々の言ふ表現の美一格好とか、材料の組合せとか、色彩——に於ても、過去建築の方法論上の全遺産を完全に究め盡したものを持ち來さねばならない。表現の美に關する範圍内に於て、過去日本の建築に表はれた比例、材料の組合せ色彩等に於て、西洋建築に未だ見出し得ない多くの物を持つて居る。然しそれは國粹建築主義の唱へる單に茫然と日本人の趣味性に期して失つてよいか。過去日本建築の合理性の下に日本の氣候的、社會的條件が歴史の長い過程の下に生んだ日本人の審美觀が創りなした結果である。我々は其處に遊戯的な趣味性の發現を少しも認め得ない。使用目的に合致した最極の形態を認める。建築の内容と形式が一つの統一された型の中に於て分離し切斷し得ざる聯關の状態に持ち來たらされたものとして、過去日本建築の眞價を認識することが出來るのである。

國粹建築主義が建築の内容に無關心に單にその形式のみに過去日本建築の折衷を試みることは我々が祖先の遺産に對して恥すべきことである。我々は過去の日本建築の表現美をあらゆる方法を以つて把握するにもそれは現代建築の社會的、經濟的要求と合致する範圍内でなければならない。新しい技術新しい材料新しい構造原則の條件の下に於いてはなければならない。

現代建築は現代社會の特質たる經濟的合理主義の下に現代日本の地理的氣候的條件を現代日本の建築技術にて解決したる後始めて形式化の過程に於ける藝術的問題となり得るのである。そしてかく形式化された建築に於て、建築の本質たる内容と形式の完全な統一の下に現代日本といふ歴史的發展過程の一段階に於ける、又地理的一定の位置に於ける眞の正しい建築が形成せられるであらう。それが過去の日本の建築と形に於て類似して居やうが居なからうが問題ではない。恐らくその細部の形に於て全く相違したものととなるであらう。然し其處に我々は日本的な何物かをより多く發見するのである。

結 語

建築は社會の發展に伴ひ變遷して行く。現代建築に表はれた四つの傾向もやがて自然淘汰の下に消滅すべきものは亡び、眞に現代社會の根底に根ざしたもののみに尙も發展しつゝけて行くのであらう。

現代建築がその發展の方向を把握し得ず渾沌たる四大潮流の下に低迷して居ることは一に現代建築家が建築の本質を忘れ、誤れる建築藝術にのみ終始してゐる結果であり、宮殿、寺院の壯麗さのみに藝術としての建築の價値を認める過去建築史の現代建築家に教へた「建築とは裝飾せられた建設物」の觀念に起因するも

のである。

今や新しい眞實の建築史完成の時である。建築發生の根源は實に社會的欲求にあり、それが地理的條件の適合性となつてはじめて建築が形式化せられるといふことが識り得らるゝならば、我々が近き過去に於て持つた多くの折衷主義建築もその系統的な過程の内にそれは作者の「現代建築の本質把握の終極に至る道程」として理解出來やう。

いづれの藝術に於てもその傾向は容易に現出されるものでなく、作者の思索の過程中に於て、凡ゆる潮流の批判検討の後、やがて何等かの一つの方向に向ふ。そのとき作品は作者の一つの藝術的過程として見出され、検討と批判の下に秩序統制を帯びたその作者の藝術的過程の變遷を物語る。西洋建築様式から國粹建築へとさまよい歩いた我々は茲でその後に来る明日への建築を持つ。「その後に来るもの」即ち「民族建築」である。